第1回 生命（いのち）を見つめる フォト&エッセー

入賞作品集

主催：日本医師会、読売新聞社
後援：厚生労働省
協賛：東京海上日動火災保険株式会社、
東京海上日動あんしん生命保険株式会社

第1回 生命（いのち）を見つめる フォト&エッセー

目次

contents

表彰式 …… ❶
主催者あいさつ …… ❷
祝辞 …… ❸
審査経過報告 …… ❹
読売新聞特集紙面（フォト部門） …… ❺
フォト部門入賞作品紹介
・厚生労働大臣賞・日本医師会賞
読売新聞社賞・審査員特別賞 …… ❻〜❼
・入選 …… ❽〜❾
・審査講評（フォト部門） …… ❿〜⓫
エッセー部門入賞作品紹介
一般の部
・厚生労働大臣賞 …… ⓬〜⓭
・日本医師会賞
・読売新聞社賞 …… ⓮〜⓯
・審査員特別賞 …… ⓰〜⓱
・入選 …… ⓲〜⓳
読売新聞特集紙面（エッセー部門） …… ⓴〜㉔
中高生の部
・最優秀賞 …… ㉕〜㉗
・優秀賞 …… ㉘〜㉚
小学生の部
・最優秀賞 …… ㉛
・優秀賞 …… ㉜〜㉝
・審査講評（エッセー部門） …… ㉞〜㉟
審査員一覧 …… ㊱

※受賞者の年齢は平成30年2月24日現在のものです
※作品は原則、原文のまま掲載し、専門用語もそのまま使っています

表彰式

平成30年２月24日　読売新聞東京本社

3列目（右から）

●フォト部門　入選
戸崎　安司　様

●フォト部門　入選
丹羽　賢一　様

●フォト部門　入選
金指　栄一　様

●フォト部門　入選
伊藤　孝　様

●エッセー部門　入選
御代田　久実子　様

●エッセー部門　入選
八木　房子　様

2列目（右から）

●フォト部門審査員
女優／音楽家
松下　奈緒　様

●エッセー部門審査員
女優
水野　真紀　様

●エッセー部門審査員
作家／福聚寺住職
玄侑　宗久　様

●エッセー部門　中高生の部優秀賞
下萩　南耀　様

●エッセー部門　中高生の部優秀賞
古泉　修行　様

●エッセー部門　中高生の部優秀賞
穴田　未優　様

●エッセー部門
中高生の部最優秀賞
河野　未実　様

●エッセー部門
小学生の部最優秀賞
横山　紗来　様

●エッセー部門　小学生の部優秀賞
石野　美宙　様

●エッセー部門　小学生の部優秀賞
新池谷　悠　様

●日本医師会常任理事
道永　麻里

●読売新聞東京本社写真部長
滝鼻　太郎

●読売新聞東京本社医療部長
山口　博弥

1列目（右から）

●東京海上日動火災保険
常務執行役員
中村　直樹　様

●フォト部門審査員
写真家／日本写真家協会長
熊切　圭介　様

●エッセー部門審査員
東京大学名誉教授／解剖学者
養老　孟司　様

●厚生労働省大臣官房審議官
椎葉　茂樹　様

●フォト部門　審査員特別賞
柴　侑貴　様

●フォト部門　日本医師会賞
大野　武　様

●フォト部門　厚生労働大臣賞
塗中　美知子　様

●エッセー部門
厚生労働大臣賞
重信　雅美　様

●エッセー部門　日本医師会賞
渡辺　恵子　様

●エッセー部門　読売新聞社賞
小川　かをり　様

●エッセー部門　審査員特別賞
馬場　広大　様

●日本医師会長
横倉　義武

●読売新聞東京本社事業局次長
林　路郎

主催者あいさつ

日本医師会長
横倉　義武

主催者を代表いたしまして、一言ごあいさつを申し上げます。本日は、多くの皆様のご参加の下に、表彰式を開催させていただきますことを深く感謝申し上げます。

本コンテストは、長年にわたって実施して参りました「生命（いのち）を見つめるフォトコンテスト」と「心に残る医療体験記コンクール」を統合し、読売新聞社との共催で今年度より開始したものです。

今回の入賞作品を拝見いたしましたが、フォト部門では生命の輝く一瞬を捉えた作品が、またエッセー部門では医師を始めとした医療関係者との心温まる交流などを描いた作品が多く、改めて生命や絆の大切さに気づかされ、私も深い感銘を覚えました。受賞者の皆様にもぜひ、お互いの部門の作品をご覧いただき、何かを感じ取っていただければと思います。

わが国では、医療技術の発展、新たな医薬品や医療機器の開発などによって、世界トップレベルの平均寿命を達成しました。高齢になっても、元気で健やかに暮らしていくことが今後の大きな課題となっていますが、その秘訣は若いうちから健康を意識してもらうことにあると考えています。

日本医師会では、皆さんに何でも相談でき、いざという時には専門の医療機関を紹介してくれる「かかりつけ医」をもつことを呼び掛けるとともに、医師の側にも「かかりつけ医」としての意識を高め、その機能を向上することを目的として、研修会等を行っています。ぜひ、本日ご参加の皆様にも「かかりつけ医」をもっていただければ幸いです。

日本医師会は、今後も、「国民と共に歩む専門家集団」として、「国民の皆さんがそれぞれ住み慣れた各地域で安心して健康に暮していくためには何ができるのか」を常に考え、国にさまざまな政策を提言していきたいと思いますので、引き続きのご支援・ご協力をお願いいたします。

結びになりますが、改めまして、共催の読売新聞社、ご後援の厚生労働省、ご協賛いただいております東京海上日動火災保険株式会社並びに東京海上日動あんしん生命保険株式会社を始め、本コンテストの実施にご尽力いただきました方々に、心より御礼申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。

受賞者の皆様、本日は誠におめでとうございました。

祝　辞

厚生労働省大臣官房審議官
椎葉　茂樹

第1回「生命（いのち）を見つめるフォト&エッセー」表彰式に当たりまして、一言お祝いの言葉を申し上げます。

本日、栄えある表彰を受けられる皆様に、心からお祝いを申し上げます。また、新たなコンテストを創設するためにご尽力されました、関係者の皆様に深く敬意を表します。

今回のコンテストには、全国から多数の作品が寄せられたと伺いました。フォト部門でございますが、生命の尊さ、大切さを感じさせる写真、そしてエッセー部門はご自身でご家族の体験に基づく心に響く作品ばかりで、国民の皆様が安心して暮らせる環境を整えていくことの重要性を改めて痛感いたしました。

今回、フォト部門で厚生労働大臣賞を受賞されました達中美知子さんの作品でございますが、近所のお子様とご年配の方との交流の場をおさめた作品ということで、地域でこのような場面を垣間見ることができ、笑顔を支える安心の大切さを大変感じたところでございます。

エッセー部門で厚生労働大臣賞を受賞されました重信雅美さんの作品でございますが、薬物依存のために入院することになったお母様の日常を温かく見つめ寄り添ってくれた看護師長に、お母様だけではなく、ご自身も不安や悲しみから救われた体験をつづっていただいたものでございます。目の前にいる入院している方だけではなく、さらには苦労したご家族の思いにまで寄り添い続けた看護師長さんの、誠実で献身的なご尽力には頭が下がる思いでございます。また、重信さんはこの経験を経て、現在精神科のデイケアプログラムで、声を出す楽しさを患者の皆様に伝えていらっしゃるとのこと。つらい時期を乗り越えて、支えを必要とする方に寄り添われていることに対しまして、胸が熱くなったところでございます。

我が国では、いわゆる団塊の世代が75歳以上となる２０２５年に向けまして、国民の一人一人が安心して医療、介護サービスを受けられる体制の構築が急務となっているところでございます。これからも、このコンテストをはじめとして国民の皆様の声をお聞きし、よりよい医療や介護が提供できるよう取り組んでまいりたいと考えております。

最後に、本日お集まりの皆様のより一層のご健勝とご活躍をお祈りいたしまして、私のお祝いの言葉とさせていただきます。

審査経過報告

日本医師会常任理事
道永　麻里

入賞者の皆様、おめでとうございます。

第1回「生命を見つめるフォト&エッセー」の審査経過をご報告申し上げます。

「生命を見つめるフォト&エッセー」は、昨年5月11日に読売新聞の社告をもって募集を開始いたしまして、10月5日に締め切らせていただきました。

その結果、「フォト部門」は、2206点のご応募を、「エッセー部門」は、「一般の部」984編、「中高生の部」110編、「小学生の部」21編、合計で1115編のご応募をいただきました。

審査につきましては、「フォト部門」は、昨年10月30日に写真家及び日医広報委員会委員の6名の審査員により、第一次審査をよみうり大手町小ホールで行い、応募作品の中から101点を選出しました。

最終審査は、11月29日、日本医師会館において、日本写真家協会長の熊切圭介様、動物写真家の岩合光昭様、女優／音楽家の松下奈緒様、厚生労働省医政局総務課医療政策企画官の長房勝也様、読売新聞東京本社編集局写真部長の滝鼻太郎様、それに私が加わり、慎重に審査いたしました。

その結果、厚生労働大臣賞、日本医師会賞、読売新聞社賞、審査員特別賞のほか、入選5点が決定しました。

「エッセー部門」は、昨年10月23日・24日の両日、元国語教師の方々を中心にした審査委員延べ24名（23日：13名・24日：11名）により、第一次審査を読売新聞東京本社会議室で行い、応募作品の中から139編（内訳は、「一般の部」101編、「中高生の部」23編、「小学生の部」15編）を選出いたしました。

つづきまして、11月3日、日本医師会広報委員会委員のうち8名が審査委員となり、第二次審査を都内のホテルで行い、第一次審査を通過した作品から42編（内訳は、「一般の部」21編、「中高生の部」12編、「小学生の部」9編）を選出いたしました。

最終審査は、12月13日、読売新聞東京本社において、東京大学名誉教授／解剖学者の養老孟司様、作家／福聚寺住職の玄侑宗久様、女優の水野真紀様、厚生労働省大臣官房審議官の椎葉茂樹様、読売新聞東京本社編集局医療部長の山口博弥様、それに私が加わり、慎重に審査いたしました。

その結果、「一般の部」では、厚生労働大臣賞、日本医師会賞、読売新聞社賞、審査員特別賞のほか入選が5編、「中高生の部」では、最優秀賞1編、優秀賞3編、「小学生の部」では、最優秀賞1編、優秀賞2編が決定しました。

その後、両部門の受賞者が2月14日付の読売新聞全国版の社会面に発表され、本日の表彰式を迎えることになりました。

ここに、発表に至るまでの各審査段階の概要を報告し、本日受賞されました皆様に改めて心よりお祝いを申し上げますとともに、ご応募いただきました皆様、更には、このコンテストにご支援賜りました多数の方々に感謝を申し上げまして、経過の報告とさせていただきます。ありがとうございました。

第1回「生命(いのち)を見つめるフォト&エッセー」　フォト部門

多くの人にいのちの尊さや大切さを伝える第1回「生命(いのち)を見つめるフォト&エッセー」（主催＝読売新聞社、日本医師会、後援＝厚生労働省、協賛＝東京海上日動、東京海上日動あんしん生命）の入賞作品が決まった。フォト部門には全国から2206点の作品が寄せられ、厳正な審査のもと選ばれた9点の入賞作品を紹介する。　（敬称略）

「母さんお肩をたたきましょう～コンコンコン♪」
伊藤孝 49（札幌市）

「60回目の結婚記念日」
金指栄一 68（横浜市）

「じいちゃんの長芋」
丹羽賢一 42（仙台市）

「順番ですよ」
戸崎安司 69（千葉市）

「輝く」西本睦子 53（大津市）

入選

厚生労働大臣賞
「愉快なひと時」逵中(つじなか)美知子 70（三重県多気町）

読売新聞社賞
「おしゃぶり」富士本晃 49（札幌市）

審査員特別賞
「愛おしい…」柴侑貴 30（沖縄県糸満市）

日本医師会賞
「負けない」
大野武 73（徳島県上板町）

【審査員】（順不同）
熊切圭介（写真家、日本写真家協会会長）
岩合光昭（動物写真家）
松下奈緒（女優、音楽家）
長房勝也（厚生労働省医政局総務課医療政策企画官）
道永麻里（日本医師会常任理事）
滝鼻太郎（読売新聞東京本社写真部長）

数字でなく「個」の人生

講評　熊切圭介
写真家
日本写真家協会会長

「百人の死は悲劇だが、百万人の死は統計上の数字でしかない」という言葉がありますが、とても恐ろしい考え方です。ベトナム戦争は死者数百万人、パレスチナでは数万人などと、時間がたつにつれ個の死については語られなくなり、数字の規模が問題の中心になることがあります。私達が人間の生や死について語る時は、一人の人間の生死について語る姿勢を失ってはならないと思います。今回の作品を見て、改めて生命の大切さを痛感しました。最近はカメラの機能が素晴らしく進歩したので、表現も多種多様になりましたが、人間が日常生活の中で元気に生きている姿を撮るという基本姿勢は大事にしたいものです。

今回、厚生労働大臣賞を受賞した作品「愉快なひと時」は、楽しく面白い作品ですね。大笑いしているおばあちゃんの横に、鉢巻きをした子どもがとぼけた表情で座っているのですが、人間の組み合わせの面白さに思わず笑ってしまいました。体のあちこちに絆創膏を貼っているおばあちゃんの姿にもリアリティーがあります。二人の姿を並列で撮影しているので効果的な画面になりました。

日本医師会賞の「負けない」は、杖をついた老人が田舎道を歩いているという何気ないスナップのように見えますが、「負けない」というタイトルから伝わってくるものは、少々のことではへこたれないぞ、という老人の強い意志と意欲です。読売新聞社賞「おしゃぶり」の画面に写っているのは多分、アザラシの親子だと思いますが、母親に抱き抱えられるようにして笑っている姿をあたかも人間の親子のようなイメージで擬人化して撮影しているので、少し甘えているような表情が生きています。

審査員特別賞「愛おしい…」の母親に抱かれた赤ちゃんに優しくキスをしている兄。この子の表情が実にいいですね。画面全体から家族愛に満ちたヒューマンなイメージが強く伝わってきます。その情景を柔らかい光線で包み込むように撮影しているので、格調の高い素晴らしい作品になりました。

＼今日からできる／

がんばらない健康法。

健康のための、一、十、百、千、万！

高齢者の皆さん、ぜひ始めてみてください。

一読（いちどく）
新聞・雑誌・本など、一日一回、文章を読み、認知機能を刺激しましょう。

十笑（じゅっしょう）
一日十回、笑いましょう。免疫力が高まり、がん予防になるとも。

日本医師会キャラクター「日医君」

日本医師会
Japan Medical Association

百吸（ひゃっきゅう）
一日百回、深呼吸を。肺機能を高め、自律神経の安定化・ストレス解消に。

千字（せんじ）
日記・手紙・メモなど、一日千字書いて、認知機能を高めましょう。

万歩（まんぽ）
歩くことはメタボ予防、記憶力向上、認知症予防に効果的。無理ない範囲で毎日歩きましょう。

―― 高齢者の健康法（石川恭三杏林大学名誉教授）より

厚生労働大臣賞

愉快なひと時

逵中　美知子（70歳）
三重県

日本医師会賞

負けない

大野　武（73歳）
徳島県

読売新聞社賞

おしゃぶり

富士本　晃（49歳）
北海道

審査員特別賞

愛おしい…

柴　侑貴（30歳）
沖縄県

入選

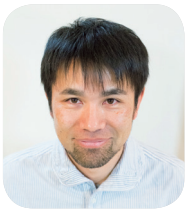
母さんお肩をたたきましょう ～コンコンコン♪

伊藤　孝（49歳）
北海道

60回目の結婚記念日

金指　栄一（68歳）
神奈川県

じいちゃんの長芋



丹羽　賢一（42歳）
宮城県

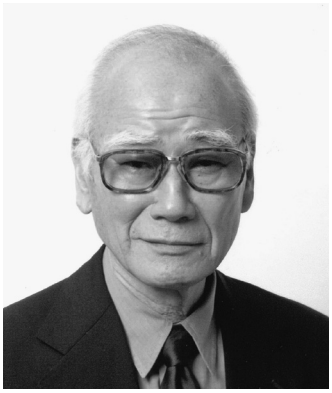
順番ですよ

戸崎　安司（69歳）
千葉県

輝く

西本　睦子（53歳）
滋賀県

審査講評（フォト部門）



フォト部門審査員
写真家／日本写真家協会長
熊切　圭介

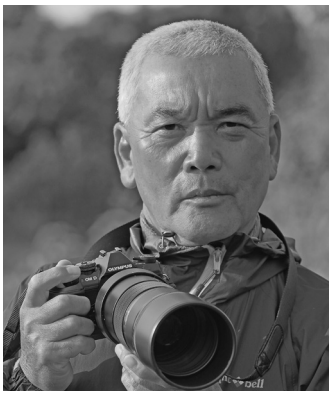
皆さん、おめでとうございます。僕はこういう表彰式に出るのが楽しみです。この写真を、一体どういう人が撮ったのかと。そうするとぴったりの人もいるし、「え？　この人がこんな写真を」という意外な人もいるし、そういうところが非常におもしろいですね。やはり、そこに人間のおもしろさが出てくると思います。

最近、カメラの機能が非常に進歩したということもあって、表現が非常に多彩になってきたし、また、写真を楽しむ人が非常に増えています。そういう面で、写真というメディアのおもしろさ、楽しさ、魅力、そういうものが多くの人に親しまれ、そしてその中から非常におもしろい表現を持った方も出てくる。

先日、東京の新宿である人の写真展が行われました。その方は88歳ですが、その写真がまた実におもしろい。日本人というのは、例えば楽しげな写真の表現が割と不得手ですが、その方の撮った写真はユーモアにあふれて、実にクリエイティブなんです。そういう意味でとてもおもしろかった。先ほど申したように、写真というメディアの表現がより豊かになってきた中での、写真というもののおもしろさが存分に出ていると思います。

厚生労働大臣賞を受賞した方の作品は、本当に見ていて思わずこっちも笑ってしまうような作品です。シリアスな表現というのは、日本人は割と得意なのですが、ユーモアのある表現というのはなかなか難しい。厚生労働大臣賞の作品は、見ていて理屈抜きに「あ、おもしろいな」と思います。そこには場面のおもしろさもありますが、やはり人間のおもしろさや人間の持っているさまざまな姿、そういうものが、写真というメディアを通して表現されています。

今回の受賞作はおもしろい作品、楽しい作品、魅力的な作品、それから表現力豊かな作品と、それぞれ実に多彩です。受賞された一人一人の顔を見て、「あの人がこの写真か」と思い、実に楽しく過ごしました。人間の生活というのは実に多種多様なわけですから、言ってみれば写真というのは何でもありの世界なんですね。その中で、その写真の魅力を存分に発揮した作品が、たくさん選ばれたということがとてもよかったと思います。



© Iwago Photographic Office

フォト部門審査員
動物写真家
岩合　光昭

厚生労働大臣賞の「愉快なひと時」は、子どものおどけた様子と、おばあちゃんのちょっと恥ずかしそうな表情がなんとも言えません。二人の豊かな感情があふれてくる1枚です。

日本医師会賞の「負けない」は、ポーズをとったわけではなくて自然な描写で、とても優れた作品だと思います。動くことは生きることなので、動くことの価値が感じられます。

読売新聞社賞の「おしゃぶり」は、画面の切り取り方や構図がすばらしい。アザラシの赤ちゃんに目が吸い寄せられるような、かわいらしい、愛らしい作品です。

審査員特別賞の「愛おしい…」は、撮られた方が旦那さんということが伝わってくる作品です。命の尊さや、赤ちゃんに対する母親の愛情も凝縮されていますね。

全体を通して、撮影者の被写体に対する愛おしさ、愛情が伝わってくる作品ばかりだったと思います。個人的には職業柄、動物写真での力作を見てみたいですね。撮った人がどういう思いで被写体に対しているかは自然と伝わってきますので、また今回同様、思いあふれる作品を拝見できたら嬉(うれ)しいです。

フォト部門審査員
女優／音楽家
松下　奈緒

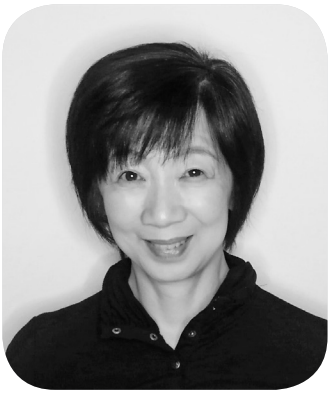
厚生労働大臣賞の「愉快なひと時」は、おばあちゃんと子どもさんの真逆の表情から、正反対の感情が読み取れるのが面白い作品ですね。これから大きくなって人生を歩んでいく子どもさんと、何十年生きてきて、今人生を楽しんでいるおばあちゃん…年代的な対比も面白いと思います。

日本医師会賞の「負けない」は、作りこんでいない自然な感じが伝わってきてとてもいいですね。被写体のおじいさんの表情は真剣にも見えますし、ユーモラスにも見えます。一枚の写真から、人間のいろいろな一面が見えてドラマを感じる作品だと思います。

読売新聞社賞の「おしゃぶり」は、「自分もあんな写真を撮ってみたい！」と感じる、とても可愛らしい一枚。人間もアザラシも親子の愛は同じなのかな……と思えて、ほっこりしますね。子アザラシのくりくりとした目から、母親に対する安心感が伝わってきます。

審査員特別賞の「愛おしい…」は、「生命(いのち)を見つめる」という今回のテーマが感じられる作品。お母さんと赤ちゃん、だとありきたりな構図になってしまいますが、お兄ちゃんが入って3人になることで、赤ちゃんが産まれたことへの喜びを強く感じられます。それをお父さんが撮影しているのかな……と想像すると、家族のストーリーが見えてくるようです。

厚生労働大臣賞



重信　雅美（56歳）
東京都

寄り添う眼差しに

町外れの山の中腹に、その病院はひっそりと佇んでいた。地域で暮らす子どもたちにとって、そこは不用意に立ち入ってはならない「異界」であり、一度迷い込んだら、二度と社会には戻ることができない恐ろしい場所なのだと、大人たちから言い聞かされていた。

私の母が、その異界の住人になったのは、私が15歳の時。母、39歳。薬物に溺れ奇行を繰り返し、警察に保護されて強制入院の措置がとられた。子どもの頃から恐れていた異界に、母は吸い寄せられるように行ってしまった。しかも、人間であることを放棄して。私は、泣くことも怒ることもできず、ただぼんやりと、

『幸せな未来なんて、もう望むことはできないのだろうな』

と考えていた。

母が入院して、7年が経った頃だった。母の保護義務者だった祖母が亡くなった。私は、東京で一人暮らしを始めていたが、市の職員から電話があり、祖母の代わりに保護義務者を担えと迫られた。母と離婚をした父や未成年の弟に、それを押し付けることはできない。母の親族は、皆、拒否したのだという。「形だけだから」と言い含められて従った。すると、早々に病院のケースワーカーを名乗る女性から電話が掛かってきた。母に関することを矢継ぎ早に質問した後、彼女は柔らかい口調でこう言った。

「今日はお話が出来て良かったです。ほとんどお見舞いにも来られないので、私、お母様は見捨てられたんじゃないかと思って心配していました。お母様のこと、見捨てないであげてくださいね」

頭から足元まで、一気に血が下がったような気がした。

『見捨てないで？　見捨てられたのは、私の方！　あの人が、私たち家族にどんな酷いことをしたのか、何も知らないくせに！』

言い返したかったけれど、ノドがギュッと締めつけられたように感じて、声が出せなかった。酷く殴りつけられたことや、錯乱した行為の数々が思い出された。電話を切った後、『今後、一切の連絡を拒否します』とハガキに書き、病院に送り付けた。

数日後、封書が届いた。白い便箋に丁寧な文字でしたためられている。先代の院長夫人であり、看護師長でもある人からの手紙だった。

『あなたの悲しみは如何ばかりかと、お察し致します。幼い頃から、大変な経験をされましたね。私はお父様にも、お祖母様にもお会いしてお話を伺っています。辛いことを、あなたがこれ以上背負わなくても良いように、私たちも何等かの対

策を考えて行きたいと思っています。どうぞ、お母様のことはご心配なさらずにいてください』

私は、気が抜けたように座り込むと、声を上げて泣いた。私や母のような人間に、寄り添ってくれる人がいる。母が去ったあの日から、事情を知る大人は皆、口を閉ざしてしまった。私の中の不安や悲しみに、耳を傾けてくれる人は一人もいなかった。握りしめた手紙から、看護師長さんの温もりが、静かに伝わってくるような気がした。

『先日、みんなでブドウ狩りに行きました。お母様は、随分たくさん収穫されていましたよ。とても楽しかったとのことです』

『お母様は、他の患者さんたちからママと呼ばれて慕われています。面倒見の良い方ですね』

『クリスマスパーティーで、歌を披露されました。なかなかの歌唱力です！』

折に触れ届く手紙には、人間としての母の暮らしが綴られていた。母の日常を、温かい眼差しで見つめ寄り添う人がいる。それだけで十分だと思った。そして手紙の封を切る度に、私と母が救われて行くように感じられた。

それでも、母に会うことは、さらに長い時間を要した。再会が叶った日、病棟の奥にある鍵のかかった扉を開けると、その先の長い廊下の途中に、笑顔の母が立っていた。白髪が増えて小さくなっていたけれど、そっと手を取ると、手をつないで歩いていた頃と何も変わらない母の手がそこにあった。

看護師長さんは、病める人たちも等しく、尊厳ある人間なのだと私に教えてくれた。手紙のやり取りが途絶えて程なく、ご病気で旅立たれたと伺った。母もまた、40年間の入院生活を終えて、2年前に眠るように逝った。私は、たったひとりで母を見送った。

私は今、精神科のデイケアプログラムで、声を出すことの楽しさを患者さんに伝えている。看護師長さんと母が、寄り添うように側にいてくれるのを感じる時がある。私は2人の眼差しと共に、幸せな未来を生きている。

受賞作品を読んで

精神病患者であった母親、入院先の病院の看護師長、娘である作者、この三人の長年の関係から、作者がしだいに成熟していく過程が素直に描き出されている。

人生で負になることを避けようとする現代社会で、作者はむしろ得難い体験をしてきたとも言える。母娘の関係はどうにもならないからである。

いまでは親は子どもに迷惑をかけたくないと言い、親子の距離を離そうとする。それが子どもの成熟を遅らせるとは考えない。問題が起こらず、平和な社会で、若者が成熟するのは難しい。「若い時の苦労は買ってでもしろ」というのは、もう流行らないか。そんなことを感じてしまった。

（養老　孟司）

日本医師会賞

渡辺　恵子（58歳）
徳島県

A先生の「ここだけの話」

今から17年前。父が66歳の時に脳腫瘍が見つかった。父はその6年前に脳出血で倒れ、何度も危機を乗り越えながら、ようやく平穏な日常が戻ってきた矢先のことだった。

総合病院で緊急手術をしたのだが、患部を取り除いても、月単位でまた別の場所に腫瘍ができ、父は1年の間に4回もメスを入れた。

その度に父の身体機能や意識レベルが衰え、最後の手術の後は、排泄の感覚も麻痺してしまい、母や私のこともわからないようだった。

父は日頃から、自分が認知症になったり、意識障害に陥ったら、自分の哀れな姿を他人には絶対に見せないでほしいと言っていた。私たちは父の意思を尊重してあげようと、友人、知人には一切知らせていなかった。

母は病室に折りたたみの簡易ベッドを持ち込み、毎日泊まり込んでいた。そして何かに取り憑かれたように一日中父の傍に張り付き、時々ドアを開けては人の気配を窺っている母の行為は、周りから見ても異常だった。私は正直言って、父よりも母の方が心配だった。

主治医のA先生は、頻繁に病室を訪ねてくれた。穏やかで、ちょっと間延びした口調で、「どうですか〜？　変わりないですか〜？」って、声をかけながら入ってくる。今から思えばA先生のその言葉は、父だけではなく、私たちにも向けられていたのかも知れない。母は回診の度に、「絶対に治りますよね？」って、すがるような目でA先生を問い詰めた。A先生から父の病状や余命をすべて知らされていた私は、いたたまれない気持ちになった。A先生は母から目を逸らさず、優しい眼差しで大きく頷いてくれた。あの時の母に、父の身体に忍び寄る現実を冷静に受け止められるとは、到底思えなかった。私はA先生の思いやりに、いつも救われていた。

そしてあの出来事は、父が他界する1か月ほど前だったろうか。私たちはほんの15分、売店に行くために病室を空けた。買い物袋をぶら下げて部屋のドアを開けた時、私たちは呆然と立ちすくんだ。中では父の無二の親友だった寛吉さんが、父の両頬を撫でながら、何か語りかけていた。

すると次の瞬間、父が突然「グワー」っと、唸り声を上げた。普段は虚ろな目で、天井を見上げているだけだった父が、ベッドから起き上がろうとする仕草を見せた。そして顔をくしゃくしゃにして、大粒の涙が流れ出した。そして寛吉さんが父の両手を握り締め、「友ちゃん、会えてよかった」と言った時、父は確かに首を縦に振った。その時の父は、喜びの感情を全身で表現しているように思えた。

午後の回診にA先生が現れた時、私は

さっきの光景の一部始終を打ち明けた。

「夫との約束を、守ってあげられなかった」母は顔を覆い、その場に泣き崩れてしまった。3人の間に束の間の沈黙が流れた。A先生は、「後から、改めて伺います」と言い残して、部屋を出て行った。

それから5時間ほど経った、夜の8時過ぎ、ドアをノックする音がした。母と私は顔を見合わせ、恐る恐るドアを開けると、私服姿のA先生が立っていた。

「今、勤務が終わって、帰りに寄りました」A先生は椅子に座って、静かに語り始めた。「僕の父は、住職でしてね。僕が医学部を卒業した時に、父に言われた言葉があるんです。『病巣を発見するだけの人間ロボットになるなよ。常に患者と家族の心に寄り添え』って。西洋医学を志す僕としては、父のうんちくを聞くのが鬱陶しい時期もありました。でも、今では僕の、貴重な羅針盤になっています」

「で、先ほどのお父様の件なのですが…。」

A先生は、急に姿勢を正した。

「これは、『ここだけの話』ですが…、お父様が元気な時に言われた言葉は、真実です。そして今日のお父様の姿も真実です。人間の気持ちは、日々移り変わっていきます。お父様は、そのお友だちに会いたかったのです。お父様は、きっと嬉しかったと思いますよ」

「でも、夫からあれだけ言われてたのに…。」また涙を浮かべた母に、A先生は微笑んだ。「遺言書と同じですよ。遺言書は日付の一番新しいものが有効です。だから今日のお父様のメッセージの方が有効です」

その言葉に、母の顔から笑みがこぼれた。

「今の夫に家族ができることって何ですか」母の質問に、A先生は神妙な顔でこう答えた。

「お父様に、ご家族の幸せそうな笑顔を見せてあげてください。意識が混濁している状態でも、相手の表情だけはわかるんですよ」

A先生は帰り際に、私たちに念を押した。

「今の話、医学では証明されてないですから、絶対に『ここだけの話』ですからね」って。

間もなく父は、家族の笑顔をリュックにいっぱい詰めて、天国に旅立っていった。

あれから長い歳月が経ったが、今でも白衣を脱いで駆けつけてくれたA先生を思い出す。

今後の自分の人生においても、是非「ここだけの話」を参考にさせてもらいたいと思う。

受賞作品を読んで

意識が混濁したときのために、予めさまざまなことを決めておくことは現代社会の大きな潮流だと思います。

しかしアーノルド・ミンデルの『昏睡状態の人と対話する』という本にもあるように、発語できない人でも感情や意志は持っています。こういう医師が増え、末期こそ患者の心に寄り添う医療が実現してほしいですね。

それにしても、私服に着替えてきたのは凄いですし、遺言書と同じで「日付の一番新しいもの（感情や意志）が有効です」とはありがたい言葉です。多くの方々に読んでほしいエッセーですね。

（玄侑　宗久）

読売新聞社賞

小川　かをり（58歳）
東京都

大きなお地蔵さんのような病院

小川さんは赤ちゃんいないからと、「はい次の赤ちゃんをお風呂に連れて行きますよ」

赤ちゃんのお風呂係のスタッフがカーテンを一部屋ずつ覗(のぞ)いていく。

「赤ちゃんいないんじゃないもん。ちゃんとNICUにいるんだもん」

私は言い返したかった。でも、500グラムで生まれてしまった我が子は半分まだあの世にいるような心細さだったから、言い返せもしなかった。

「なんだかこの世のものじゃないようで恐ろしくて見に行けないわ」と、おばあちゃん。

「あらあ、かわいそうねえ、あの子、あんなにちっちゃいじゃない」

まるまると太った赤ちゃんを抱いて退院していく一家がわざわざ覗いていく。保育器に張り付いている私たち未熟児の母親たちは、背中越しに視線を感じて固まっている。

きっとみんな悪気があったわけじゃない。たった24週で早産してしまった母親失格の私に何も言い返す言葉はなかった。もくもくと、ただ黙々と毎日おっぱいを搾(しぼ)っては冷凍して病院に運んだ。自分のしたことの償いなのでだれにも辛(つら)いとも言えなかった。病院の屋上に登って何時間も飛び降りることを考えてしまったこともある。上の子がいなかったらそうしていただろう。

そんな中、担当の看護師さんは毎日、日記をつけて赤ちゃんの様子を楽しそうに語ってくれた。体重がなかなか増えないときは一緒に苦しんでくれた。私がどうしようもなく辛くなっていると、担当の看護師さんは、私の背中をたたいてあやすように語りかけた。

「この保育器はね、お母さんのおなかの中と一緒。今この赤ちゃんはおなかの中にいるみたいにゆったり過ごしているのよ。大丈夫、大きくなって親孝行してくれる子になるよ。楽しみね。ほらなんて可愛(かわい)いんでしょう。きれいな顔立ちね。私はね、この子が可愛くて仕方がないの。誇らしく思っているのよ。可愛いでしょって自慢しちゃった。担当なだけなのにおかしいでしょ？ハハハ……」

これが初めてだった。この子を褒めてもらったのはこれが初めてだった。

例えば吹雪の中で民家の明かりを見たような、凍えた時の一枚のマフラーのような、そんな温かさを肩にかけてもらった事、私は決して忘れない。

どの母親も自分の子をほめてもらいた

い。時には他人の子の価値を低めてでも自分の子の価値をを高く見たい。でもどうにもほめようのない状況の時って何度かはある。未熟児で産んでしまった母親は子育ての道のりのスタート地点でそういう状況に直面するのだ。子どもを抱えて座り込んでしまう母親が病院にはたくさんいる。

その母親たちを集めて茶話会を開いてくださった医師がいた。同じ不安を抱える母親たちの会で私はどんなに力をもらったことだろう。子どもの誕生日には自腹で誕生ケーキを買ってきて、一粒だけ小さな口にくわえさせてくださった担当医もいた。朝面会に行くとベッドが空で、担当の先生が懐に入れて抱っこしてくれていた朝もあった。

私はこの病院に助けられたと今でもその病院の横を通るとちょっと手を合わせている。お地蔵さんじゃあるまいし、と主人は笑うが私にはこの病院が大きなお地蔵様に見えた。

今、その息子は元気に大学生になって、一人暮らしをしている。心配でたまらないが、山岳部に入って人生を謳歌(おうか)している。毎学期、もう用もないのに、医療スタッフのところに成績表をもっていってほめてもらって帰ってきていた。大学の合格報告も先生と看護師さんの所へまず走って行った。

「生まれてこられて助けてもらって育ててもらって本当に良かった。良い人生だった」とこの子は必ず一生を終える時に言うと思う。医療がなかったならば、この子の人生も私の人生も無かったのです。

受賞作品を読んで

春から中学生になる息子がいる私にとって、文中にある「どの母親も自分の子をほめてもらいたい」という言葉は響きました。

息子さんが大学生となり時間的距離が生まれたことで、当時の過酷な状況が丸みを帯びた表現になっているところもこのエッセーの良さだと思います。

相手の気持ちを想像し、寄り添うことの大切さに改めて気付かされます。医療行為にとどまらず、無限の慈悲の心で患者やその家族を包み込む医療従事者が働く「お地蔵さん」のような病院にするにはどう在るべきか……。正解がないだけに個々の在り方が問われるのでしょうね。（水野　真紀）

審査員特別賞

馬場　広大（24歳）
鹿児島県

がらんどうの生

高校生のころ、神様に祈る真似（まね）をしたことがある。部活の遠征中、あまりの寂しさに耐えきれず、私は手を合わせた。チームメイトは不思議そうな顔をしていたが、そうでもしないと、私は苦しかったのである。よく知りもしない神様の存在より、祈る、という行為にすがることが、私の心を落ち着かせた。

思えば、大学の4年間、薬を飲んでいたのも、何かにすがることにほかならないだろう。

高校卒業後、田舎から都会の大学へ進んですぐに、症状はあらわれた。道ですれちがう人に殺されるのではないか。そんな考えが頭をよぎるようになった。やっとの思いで大学にたどり着いても、学生が、教室が怖く、授業に出られない。一人暮らしを始めたばかりで、相談できる相手はいなかった。

心療内科へ行った。しばらくして、社交不安障害という病名を告げられた。私はそこに通い始めた。薬を服用するようになった。毎日、何錠か飲んでいると、頭がぼんやりして、余計なことを考えずに済んだ。

しかし薬に頼ってしまってはいけなかった。私には、まず治そうという気持ちが足りなかったのである。薬を処方されることで、自分の弱さを認めてもらえる気がして、甘えた。薬を飲んでさえいれば大丈夫だと思いこみ、力を振りしぼる方法を、忘れた。相変わらず、授業には出られない。単位も落としてばかりだ。留年が決まった。心療内科へ通うペースが上がった。薬の量はどんどん増えていく。気づいたら就職活動の時期を迎えていた。私は、そのとき、心も体も限界まで鈍らせていた。

飲みそびれた薬が空き箱にためてあった。あの夜、それに手を伸ばさなければ、泣きながら30錠まとめて飲まなければ、心療内科の先生に叱られることもなかったのだろう。踏みとどまった経験が、その後の私を立ち直らせたかもしれない。私は、越えた。1か月後には荷物をまとめて実家へ帰った。

つらさも悔しさも失っていた。あらゆる感情は、死に近づくと、消えてしまうのである。

あの夜、薬を30錠飲む前は、かろうじて心が生きていた。うれしいことがあると、心がうれしさで純粋に動いた。悲しいことがあると、ひたすら悲しみに暮れた。そこに混じり気はない。しかし、今はどうだ。うれしいことや悲しいことに直面しても、「一度死んだ私でも心が揺れ動くものなのか」と、わきおこる感情をどこか他人事でとらえてしまうようになった。ただ揺れ動くことがなくなったのである。どうやら私はうれしいらしい。悲しみと呼べるものを味わっているよう

だ。そんなふうに、深く感じ入ることのない心とともに、今も毎日過ごしている。

私は普通に生きている自分が恐ろしいのだろう。4年間、不安にさらされるのが当たり前だったから、心が落ち着いていると、それもまた不安なのだ。死が頭に浮かぶ。そこから目をそむけられないでいる。

昨年の末、地元で新しい心療内科を見つけ、今も通っている。薬も服用している。あの4年間よりずっとおだやかな気分で過ごせているが、それでもときどき、感じる。私は死んだようなものなのだ、と。夜の暗い川に反射する光を見て、そこへ飛びこみたくなる。しかし、一度死んだものと思っているから、飛びこんだところで、同じことの繰り返し。それで悲しむような心も、捨ててしまったのである。

私のような人間に、成長はあるだろうか。この先も、がらんどうで生きていくのだろうか。悩みが、私に死を感じさせる。

そんなある日、心療内科の先生が、言った。「君は今、混乱している。どうしたらいいかわからないんだ。でもね、生きるんだよ。死ではない、生きるほうに、目を向けるんだ」

先生は、強く言った。「君は、生きる」

あの言葉を聞いてから、少しだけだが、身の回りが輝いて見えるようになった。私が求めていたのは、理由のない生と、その肯定だったのである。

生きるということには、意味を求めがちだ。なぜ生きるのか考えるのが、人間らしさとも言えるだろう。しかし私のように、生を放棄しかけた者は、まず意味もなく生きることから始めるべきなのである。感情がどうしたとか、死が近いなどといった心のありようから解き放たれ、ただ生きる。これを地道に続け、少しずつでも時間をやりすごすことが、生への執着を生むのだ。

あの夜から1年半が経(た)とうとしている。今も、自分の中に細い空洞がひとつ通っているように感じる。それがなかなか悪くない。まだまだ理由なく生きている途中であっても、引き延ばされていく生の感触が、「弱く生きよう」という心持ちにさせてくれる。がらんどうだからこそ、しのげる風や、受け入れられるものもあるのだと、思い始めている。

受賞作品を読んで

生きることと、生きることの意味、作者は常にそれにこだわってしまう。それが病と言えば病なのである。

でもこれは、意識していない人が多いというだけで、現代では普通の病ではないか。生きることに意味がないのではない。生きることの意味を追求することに意味がないのである。

なぜ意味なのか。情報化社会だからであろう。情報は意味によって存在する。意味のない情報は情報にならない。消されてしまうのである。

作者の悩みを受け取りながら、そんなことを思った。日常茶飯事、それが生きていることのほとんどなのである。

（養老　孟司）

入選

みいちゃんへ

坂口　有美子（30歳）
東京都

みいちゃん、あのね、みいちゃんは産まれた時、すぐに小さい手足をバタバタさせて、ママにすがりついてきましたよ。産着を着せるために、看護師さんがママから離したら、とたんに大声で泣きました。信じられないほど小さくて、フニャフニャしていた、みいちゃん。「世界で一番かわいい」と、心から思いましたよ。

みいちゃん、ごめんね。ちゃんと健康に産んであげられなくて。心臓に重い病気を抱えていて、産まれてすぐ、どんどん体重が減っていった時、ママは夜も眠れませんでした。「つわりで、ろくに食事を取らなかったせい？」「お姉ちゃんの遊びにつきあって、大きいお腹で走り回ったせい？」。夜中に何度も目を覚ましては、みいちゃんの寝顔を見て、そんなことを考えました。

かわいそうなみいちゃん。産まれてずっと、入退院の繰り返し。同じくらいの月齢の子が、日様を浴びてお散歩をしているのに、みいちゃんは呼吸をするだけで精一杯。「赤ちゃんは何も言わないけど、とても辛い」と先生から言われた時は、胸が刺されるようでした。

少しでも体調を崩すと、即入院。小さな体にたくさんのコード。ママは、病院から家に帰るのが嫌でした。みいちゃんは、「どうしておいていくの？」「さびしいよ」という顔をして、目に一杯涙をためて、ベッドからじっと見上げていました。まだ喋ることもできないけれど、大きな目で「ママ、帰らないで」と、ハッキリ言っていましたね。

みいちゃん、みいちゃんの病気が分かった時、おばあちゃんはすぐに「家事は私がやるから、あんたはできるだけ、みいちゃんの側にいてやりなさい」と言ってくれました。それからおばあちゃんは毎日、仕事を早く切り上げて、病院通いで帰りの遅いママに代わって、御飯を作ってくれたんですよ。おじいちゃんは、2か月も仕事を休んで、みいちゃんのお世話を手伝ってくれました。パパも、夜、なかなか眠れないみいちゃんを抱いて、何時間もゆすって寝かしつけてくれました。

このことを、みいちゃん、大きくなっても忘れないでね。毎日が、薄氷を踏むような心地だったけれど、家族みんなが、あらん限りの愛情をみいちゃんに注いで、一日一日を乗り切っていったのです。

そして、みいちゃん。みいちゃん自身も、少しずつ、でも確実に成長しました。

最初の手術を受ける時、ママは初めて、心から神様に手を合わせました。みいちゃんはまだ6か月。6か月で、まだ新生児の服を着ている小さなみいちゃんに、もしものことがあったらどうしよう。10時間、ろくに座っていることすらできませんでした。

でも、みいちゃん。みいちゃんは、ちゃんと戻ってきましたね。自力呼吸ができず、人工呼吸器をつけていたので、だっこすることもできなかったけれど、小さなほっぺたが確かに温かかったことを、ママは決して忘れません。

そして、退院する前の日、みいちゃんは初めて声を立てて笑いました。

「聞こえましたか？　今、笑いましたよ」

思わずママが叫ぶと、近くにいた看護師さんたちが集まって、みいちゃんの頭をなでてほめて下さいました。「おめでとうございます」と、自分のことのように涙ぐんで下さる方もいましたよ。

みいちゃん、みいちゃんは産まれながらに重い心臓病を負い、それはとても不運ではあったけれど、決して不幸ではありません。ママはみいちゃんを幸せ者と思います。

パパやおばあちゃん、おじいちゃん、ひいおばあちゃんも、みいちゃんをかけがえのない希望として、心底からかわいがってくれるのです。また、病院の先生、看護師さん、多くの人がみいちゃんの生を支え、みいちゃんの一生が幸福であるように、手を尽し、念じて下さるのです。そしてこの愛情は、みいちゃんの中で、大きな力となってくれるはずです。

みいちゃん、みいちゃんが産まれて、今、7か月。1歳になるこの冬、2度目の大きな手術をします。でもママは、1度目の手術の時のような、不安な思いは、もうありません。

ひいおばあちゃんが、毎日仏壇に向かって、ご先祖様にお祈りをしているし、先生方や看護師さんも、万全の態勢をとって下さいます。そしてみいちゃんには、手術に耐える力があります。

手術室に入って、また出てくるまで、ママはとなりの待ち合い室で待っています。ずっと側にいるから、みいちゃん、無事に戻っておいで。人工呼吸器がとれたら、ぎゅっと抱きしめて、もう絶対に離さないからね。

入選

あなたには、時間がない

平井　真帆（44歳）
埼玉県

医者と病院が大嫌いで「健康だけが取り柄」と慢心し、がん検診から遠ざかっていた私。結果、41歳で非常に進行した乳がんになってしまいました。約2年前のことです。

しこりを発見し、病院に行った時には、腋の下のリンパにも転移があることがわかりました。「初期ではない」ことを確信した私は、詳しく検査をすることも治療をすることも、怖くて怖くて仕方がなく「がんは治療しなくてよい」「がんは自分で治せる」などと主張する本ばかり読みあさり、1年半余りの間、食事療法や気功治療などの、あやしげな〝闘病〟を、一人で続けていました。

「元気になってきている！　良くなってきている！」と信じていましたが、昨年末ごろ、異変を感じるようになりました。階段を上ると息が切れて仕方がないのです。「おかしい…、貧血かな、それとも自律神経でも乱れているのだろうか」と首をかしげていましたが、息切れは酷くなる一方。とうとう横になってじっとしている間も、息苦しさを覚えるほどになりました。ある方に相談すると「肺に水が溜まっているのではないか。一刻も早く大きな病院に行ったほうがいい」と、指摘を受けました。

胸水！　私は青ざめました。「主治医」と呼べる医師を持たず、孤独に闘ってきた私は、恐れおののき、慌てふためいて病院を探し始めました。7～8件は電話をしたでしょうか。その中の、1件のクリニックの、院長先生の一言が、私の運命を変えました。

先生は電話口で「今日、いらっしゃい。とにかく今日、来なさい！」と、しきりにおっしゃいます。「え、今日ですか？今日は仕事があるんですが…。まだ詳しく検査もしてないし…」。ぐずぐずと決断できない私に、押し問答の末、先生は穏やかな口調で、しかしはっきりと、言いました。

「あなたには、時間がないよ」

！

私は、その一言で、瞬時に全てを理解しました。ワタシニハ、ジカンガナイ。そう、私には、もう時間がない。残された人生の！時間が！　もう治療法を迷っている時期など、とうに過ぎてしまっており、自分が、すでに今、崖っぷちに立たされ、断崖絶壁を見下ろしていることに、私はその一言で、ようやく気がついたのです。

「わかりました。今日、お伺いいたします」。そう言って電話を切った時には、私は全てを決心していました。この先生の治療を受けよう、この治療法しかない。この先生にお願いしよう。もう迷っているひまはない。

初めて全身の検査をしました。「ちょっと息が切れるだけ」と思っていた私の右肺には、6リットルもの水が溜まっており、骨や全身のリンパにも、無数の転移があることもわかりました。一刻の猶予もない状態でした。

「くるところまで、来てしまった」

絶望でいっぱいで途方に暮れ、涙も出ない私に、先生は、確信に満ちた、しかし優しく慈悲深い声でおっしゃいました。「決して遅くないよ。これから大変なこと、いろいろあるかもしれないけど、頑張ろう」

「決して遅くない」。先生の言葉だけを胸に抱き、それからの「いろいろ大変な」治療を耐え、それらが功を奏し、今年6月、私は乳房全摘手術を受けることができました。

ここまでの道のりで、いったい何人の先生方に、お世話になったことでしょう。主治医をはじめ、溜まった水を抜いてくださった若くお美しい女医先生、形成外科チームの先生方、緩和ケアの先生、そのほか大勢の看護師さんたち…。

不思議なことに、その中の誰一人として「なぜここまで放っておいたのか」と、私を責める方はいなかった。ただ目の前で苦しみ、絶望し、助けを求めている情けない私を、大勢の医師らが必死で手を差し伸べ、死神から私の命を、奪い返してくださいました。

今までの人生で意味もなく〝医者〟を毛嫌いしていた私は、今とても困惑しています。なぜ、見ず知らずの私を、まるで我が子のごとく守ってくださるのか。それが、医師としての「本能」とでも言うべきものなのでしょうか。だとしたら、医師とは、何と尊い職業でしょう。こんなにも人に献身する職業が、他にあるでしょうか。

まだまだ「がんが治った」とはとても言えませんが、一命を助けていただき、どこも痛くなく、何も苦しくない、夢のような日々を過ごせています。私は、なんとお礼を述べてよいか、どうやって恩を返したらよいのか、途方に暮れています。

「あの子に、もう一度命をあげて、よかった」。そんなふうに、先生方に思っていただくためには、どう生きたらいいのか、模索する毎日です。

先生方、本当にありがとうございます。心から感謝しています。そして、大好きです。

入選

ビールで乾杯

御代田　久実子（62歳）
東京都

今年の6月、叔母が逝った。延命を拒否し大好きな自分の家で、静かに逝った。見事としか言えない、叔母らしい最期だった。

身体の弱かった叔母は、何度か生死の間をさまよう病気をした。延命を拒否する文書を、私の姉と作ったのは10年以上も前の事だった。20年前に車椅子の生活になった時、3年前に在宅酸素が必要になった時、関係者は口をそろえて、一人暮らしは無理だと告げた。しかし、叔母は、大好きな自宅で一人で暮らす事を強く望み、それを実行した。

ケアマネージャー、ヘルパー、訪問診療、訪問看護、訪問リハビリ、入浴サービス等々、多くの方が、叔母の一人暮らしを支援してくれていた。私は、子供のいない叔母の親族として、姉と、年数回の訪問や、入院時の対応くらいしか、担う事ができていなかった。

5月に叔母は、全く動けなくなった。3月には、私達と誕生日の外食にでかけるくらい元気だったので、いつか来ると覚悟はしていたが、突然にその日はやってきた。

叔母を支援してくれていたチームは、お互いに調整をし、新たなサービスも加え、朝昼晩深夜と、訪問をしてくれた。初めは回復を目指し、それが叶わないと判断されてからは、本人らしい最期を迎えるために、皆が悩み、試行錯誤しながら支援を組み立ててくれた。私も定年退職をし、時間ができていたので、可能な限り叔母の家に行った。

冗談を言いながら叔母のそばで過ごし、「今日も一日楽しかったね。また明日」。これが帰る時の合言葉だった。これに対し、「あなたの家の夕飯は何」と叔母が尋ねてくる事が、毎日の儀式となった。叔母は、食べる事が、難しくなっていた。

叔母の命をつないでいたのは、水分補給の点滴のみで、口から摂取できるのは、わずかなとろみ食だった。栄養補助食や介護食など、皆がすすめてくれる食べ物は、すべて、叔母の嫌いな味だった。とびきりグルメだった叔母は、まずい物はまずいと、口にしたがらなかった。

私は関係者皆に、好きな物を食べてもらいたいと、相談した。医療関係者は、本人の望む物で良いと言ってくれた。介護スタッフはこの大きさ、この形ならと、色々提案してくれた。かくして、叔母の主な飲み物は、とろみ付きサイダー、食べ物は、クリームいっぱいのチョコレートケーキ、アイス、メロンとなった。

亡くなる2週間前、姉が見舞いに来ていた時、「女子会をやろう」という事になった。女3人、ビールで乾杯した。残念ながら、とろみのついたビールは、あまりおいしくはなかったらしいが、楽しい時間だった。一人暮らしの叔母は「乾杯」が大好きだった。一緒に食事をする時は、お茶でも何でも「乾杯」とグラスを合わせてきた。動けなくなってからは、アイスで乾杯していた。好きな物は、何でも良いよと言ってもらっていたので、元気な時に大好きだったビールで、乾杯する事ができた。一緒に暮らしていた幼い頃の話など、私達はたくさんおしゃべりし、叔母は、苦しい息の中でも笑っていた。

色々な事業所、色々な職種のメンバーがチームを組むという事は、正直すべてがスムーズにいったわけではない。けれども不安や疑問を伝えると、皆真摯に受け止め、対応をしてくれた。毎日の連絡ノートは、記録が山ほどあった。皆の日々の支援の積み重ねと、叔母への思いがあふれていた。私も毎回、気になる事を書き、叔母の代わりに、ありがとうと書き続けた。壁や冷蔵庫に貼られた支援の注意事項は、次々と書きかえられていった。叔母は、来る人来る人に「ありがとう」と伝えていた。

そして叔母は、自ら点滴を断わった。

看護チームは、涙をこらえながら、それを受け入れてくれた。「私、もういいかなと思うの」と叔母は言った。私は返す言葉がみつからず、「疲れちゃったかな。ずっとがんばってきたからね」とだけ言った。そして1週間後、叔母は逝った。前の日の夜も、「あなたの家の夕飯は何」と言っていた。

長い付き合いの看護師さんと一緒に、泣きながら最後のケアをし、旅支度をさせてもらった。15年間来てくれていたヘルパーさんが、泣きながら一番好きな固さ加減のご飯をたいてくれ、枕元に供えた。

最後まで自分らしく生き抜いた叔母、本人の意志を尊重し、最後までとことん叔母と向き合い、何が最善か考えぬきながら支援をしてくれたチームの皆さんを、誇りに思う自分がいる。こういう生き方もあるのだと、教えてもらった長くて短い1か月だった。

納骨の時、医師であるいとこに、「ビールにとろみつけたの」と驚かれたのは言うまでもない。でも、「すごいね、最後まで本人らしくだね」と笑いながら言ってくれた。

叔母と、素晴らしいチームに「乾杯」。

入選

心の交流

森田　欣也（54歳）
愛媛県

2017年、5月21日の日曜日、あまいたまご焼きと、5キロものお肉に、食べきれないほどのおにぎりに、野菜に、フルーツに、スウィーツに、サンドイッチとドリンクを持ち寄って、いつものバーベキュー会場に、院長一家は法事で来れなかったけど、副院長さんと、元看護師長さんと、元看護師さんと、看護師さんとその家族、事務長さん夫婦とお孫さん、今、地域医療で頑張っているT医師の奥さんのいつものすてきな笑顔に、今では大きくなった病院に、全国から来ていた理学療法士の実習生さんたちの、元気な笑顔を加えた20名ほどのひとたちが、今年も森田晴れの下集まってくれた。

ラグビー少年だった高校3年生の18歳の時、なんの前触れもなく、突然、第3頸椎をだっきゅう骨折する事故に遭い、毎日が楽しく一番調子に乗っていた体のすべての運動機能を一瞬にして失し、全身マヒという重い障害が残った。

その後、機能回復訓練という名目の転院を繰り返したけれど、失った体の機能が回復するどころか、車イスに座れるようになるのがやっとの状態。明日という未来さえも見れなくなり、最後の最後まで私の事を支え、守り、24時間ずっと看病し続けてくれた、大切な、大切な、大切な母を亡くした。

作り笑顔だけが上手くなった7年ちょっとの入院生活を終え、大きな不安を抱えたまま、父の待つ、あたたかい自宅での生活を始めるにあたって、かかりつけとなる病院を探し、たまたま、家の近くにあった、20人ほどでいっぱいになりそうな待合室の整形外科病院にお願いしたところ、快く受け入れてくれた。そして、当時ではまだ珍しかった訪問看護で、生活の一部を支えてくれるようになって、1年半が過ぎたある日の事だった。

「何かお手伝いできる事とか、何か用事とかありませんか。」

と、看護師長さんが、

「えっ、今日は来てくれる日でしたっけ。」

テレビを観ながら、ひとりで留守番をしていた私のところに、

「ちょっと昼休みで、たまたま時間が空いたから。」

と、私より1つ年上で、非常に体格の良い、Tさんという研修医と共に、何の前触れもなく突然に来てくれた。

「森田くんって、ラグビーをやっていたんだってね。実はぼくも高校生の時にラグビーをやっていてね。」

と、T医師は、やわらかい笑顔で話しかけてくれた。ラグビーをやっていたという私の話をおぼえていてくれた師長さんが、時間を作って連れて来てくれたのだった。

「○○さんとか、ラグビー部の△△先生とか知ってる。あそこのグラウンドって……。」

そのなつかしい響きに、心は壁を作るのも忘れ、

「ぼくの嫁さんって、森田くんと高校が一緒なんよ。」

その言葉に運命さえも感じたが、しかし、次の、

「じゃ今度、お弁当でも持ってラグビーの試合を観に行こうか。食べたい物何かある。」

の言葉に、

「あっ。いいですね。」

と、本音がこぼれ出ないように笑顔を作った。

「じゃ今度、じゃ今度、じゃ今度……。」

入院中、何十回も聞いたこの言葉。わかっていた、わかっていても次こそは、ひょっとしてと思ってしまったが、そんなものは、来る事がなかった。

障害者はいつも前向きで、明るくないといけないみたいな、周りの変なプレッシャーの中、心が壁を作り、笑顔を作れと命令するようになっていた。

2か月後、大好きなあまいたまご焼きの入ったお弁当を乗せて、ラグビー場へとむかう車の中で、T医師と再会した。青く澄み切った空の下、心の壁のくずれる音がした。

「へえ～。森田くんって、本当はそんな顔して笑うんだ。もうだいじょうぶだね。」

と、私の心の障害に気づき看ていてくれた、目元が母に良く似た看護師長さんが言ってくれた。あの日から26年。ラグビー観戦からバーベキュー大会となり、私の車イスに乗って遊んでいた子供たちが、理学療法士になったり、特別支援学校の教師や看護師を目指したり、この場で出会い、結ばれたふたりが子供を連れてまた参加してくれたり、いつしか森田会と呼ばれるようになった心の交流は、台風などで中止になった年もありながらも、「私たちも毎年楽しみにしているから。」というみなさんの、たくさんのすてきな愛に支えられ、森田晴れと名付けてくれたさわやかな青空の下、今年で21回目をむかえた。

入選

共感

八木　房子（62歳）
愛媛県

悲しいかな、人には誰にも見えない「心の痛み」がある。

還暦を前に、私は全身麻酔で手術をした。突然の手術の宣告にただオロオロするばかりだった。30年間の看護師生活で、手術の説明に何回立ち会ったか数え切れない。医師と患者の間に立っていつも冷静にいたはずなのに、主語が自分になったとき、これほどまで当惑するなんて思っていなかった。

張り詰めた心で入院した。ベルトコンベアーに載った機械の部品のように事が流れていく。「お変わりありませんか?」どの看護師も同じ口調で話しかけてくる。お変わりありませんか?と訊かれても特に症状が変わることはない。「はい、ありません。」と作り笑顔で応えると、次の患者に話しかける。優しそうな目と忙しそうな目が交錯している。

看護師だった頃、「病気になると孤独を感じる。」と言った患者がいた。そんな患者の掴みどころのない話を、ゆっくり聴けるほど私には余裕がなかった。今、自分が患者の立場でベッドに横になっていると、過ぎ去った患者の言動が少しずつ心に沁みてくる。私が白衣を着ていた長い年月に、どれだけ患者により添えただろうか。否、寄り添ってもどうすることもできない、病気は最終的には一人で闘うしかないと思っていた。だから、今度は私が自分の心と対峙しなければいけないのだと思った。あの「孤独を感じる」と言った患者は自分の気持ちに寄り添ってもらいたかったのだろう。今なら、その患者に「孤独ってどんなときに感じるのですか?」と、話しかけることができるかもしれない。自分がしてきた看護が一番大切な心を置き去りにしていたのだと、今更ながら返らぬ時間が悔やまれた。

手術前日だった。夕方遅く手術室の看護師が訪床した。若い男性の看護師は私を見て挨拶をした。若くて少し頼りなさそうに見えた。

「八木さん、手術室看護師のAです。遅くなってすみません。明日の手術の手順をお話させてください。」

私の顔を見ながら丁寧な口調で話しかけてきた。病室から手術室までの流れをゆっくり話した。一方的ではなく、話の要所には時間を取り確認の言葉を入れた。私に看護師の経験があったから、ある程度のことはすんなり飲み込めた。ただ、不安を抱えている心だけが追いつかなかった。病気になって社会から逸脱したような孤独感が、霧のようにかかっているのをどうすることもできなかった。説明が一通り終わった。直ぐに退室されるのかと思ったそのとき、

「八木さん、説明は一応終わったのですが何か心配や不安はないですか?」

私が心底待っていた言葉だった。声に温かみがあった。ふと、私の心を見透かされているような気がした。同時に今まで張り詰めていた心の箍が外れた。

「私ね、心配なの。耳の手術は顕微鏡で医師一人がされるのでしょう、新聞では医療事故の報道もあるし……。考えていたら心が壊れそうなのよ。」

高揚した自分の声が、弱みを一杯曝け出しているようで哀れで悲しかった。

突然、

「そうですよね、手術するなんて怖いですよね、誰だって不安ですよ……。」

私の思いを待っていたかのように、さっと言葉が返ってきた。Aさんは少し身を乗り出し、まるで今までに私と面識があったような親しみを投げかけてくれた。心にパッと明かりが灯った。子供の頃、夏祭りで見た母の笑顔のようだった。手術は一人の医師が顕微鏡を見ながらするが、顕微鏡は二人の医師が見えるようになっていることなど詳細に話し、ニコッと笑った。安心したと言うより私はただただ嬉しかった。こんなに若いAさんが私の思いに共感してくれたことが夢のようだった。病気になって初めて人の目を見て一緒に笑った。どんな時でも、自分に寄り添ってくれる誰かがいるのだと思った。自分が心を開き謙虚な気持ちになったとき、人は救われるのかも知れない。

私はこれで明日の手術を自分の意思で受けることができる。Aさんに不安を聴いてもらったことで、私は一人ではないのだ、誰かが傍にいて人の悲しみを見ているのだと感じた。Aさんに出会えたのは偶然ではない。人は誰でも優しさを備えている。それを上手に引き寄せるのは自分でもあるのだと思った。

夜が明けた。心は落ち着いていた。大丈夫と言い聞かせながら手術着に着替えスニーカーを履いた。スリッパは転倒防止で禁じられている。ちぐはぐな私の格好に娘が笑っていた。自分でも可笑しかったのでニコッと笑い返した。心の片隅に、一瞬不安がよぎったが何があっても私の人生だと思えた。

日本医師会・読売新聞社 主催

企画・制作　読売新聞社広告局　広告

「生命を見つめるフォト＆エッセー」は、これまで長年にわたり開催されてきた「「生命を見つめる」フォトコンテスト」と「「心に残る医療」体験記コンクール」を統合し、より多くの方に生命の尊さや大切さを考えてもらいたい、との願いを込め、日本医師会と読売新聞社が開催しています。

第１回目の今回、エッセー部門には全国から 1100 点を超える作品が寄せられ、厳正な審査のもと選ばれた、「厚生労働大臣賞受賞作品」と入賞者を発表します。

本コンテストを通して、“生命” を見つめ直す機会の一助となることを願っています。

第1回 生命を見つめる フォト&エッセー

エッセー部門 受賞者発表

2月24日(土)に行われた表彰式にて、審査員らと一緒に記念撮影をする受賞者

一般の部　厚生労働大臣賞

「寄り添う眼差しに」

重信 雅美さん
東京都 56歳

町外れの山の中腹に、その病院はひっそりと佇んでいた。地域で暮らす子どもたちにとって、そこは不用意に立ち入ってはならない「異界」であり、一度迷い込んだら、二度と社会には戻ることができない恐ろしい場所なのだ、と大人たちから言い聞かされていた。

私の母が、その異界の住人になったのは、私が15歳の時。母、39歳、薬物に溺れ奇行を繰り返し、警察に保護されて強制入院の措置がとられた。子どもの頃から恐れていた異界に、母は吸い寄せられるように行ってしまった。しかも、入院であることを放棄して。

私は、泣くことも怒ることもできず、ただぼんやりと、「幸せな未来なんて、もう望むことはできないのだろう」と考えていた。

母が入院して、7年が経った頃だった。母の保護義務者だった祖母が亡くなった。私は、東京で一人暮らしを始めていたが、市の職員から電話があり、祖母の代わりに保護義務者を担えと迫られた。母と離婚をした父や未成年の弟に、それを押し付けることはできない。母の親族は、皆、拒否したのだという。「形だけだから」と言い含められて従った。すると、早々に病院のケースワーカーを名乗る女性から電話が掛かってきた。母に関することを矢継ぎ早に質問した後、彼女はまらかい口調でこう言った。

「今日はお話が出来て良かったです。ほとんどお見舞いにも来られないので、私、お母様は見捨てられたんじゃないかと思って心配していました。お母様のこと、見捨てないであげてくださいね」

頭から足先まで、一気に血が下がったような気がした。

「見捨てないで？　見捨てられたのは、私の方！　あの人が、私たち家族にどんな酷いことをしたのか、何も知らないくせに！」

言い返したかったけれど、ノドがギュッと締めつけられたように感じて、声が出せなかった。酷く殴りつけられたことや、盗んだ行為の数々が思い出された。電話を切った後、「今後、一切の連絡を拒否します」と八ガキに書き、病院へ送り付けた。

数日後、封書が届いた。白い便箋に丁寧な文字でしたためられている。先代の院長夫人であり、看護師長でもある人からの手紙だった。

「あなたの悲しみは如何ばかりかと、お察し致します。幼い頃から、大変な経験をされましたね。私はお父様にも、お祖母様にもお会いしてお話を伺っています。辛いことを、あなたがこれ以上背負わなくても良いように、私たちも何等かの対策を考えていきたいと思っています。とうぞ、お母様のことはご心配なさらずにいてください」

私は、気が抜けたように座り込むと、声を上げて泣いた。私や母のような人間に、寄り添ってくれる人がいる。母が去ったあの日から、事情を知る大人は皆、口を閉ざしてしまった。私の中の不安や悲しみに、耳を傾けてくれる人は一人もいなかった。握りしめた手紙から、看護師長さんの温もりが、静かに伝わってくるような気がした。

「先日、みんなでブドウ狩りに行きましたお母様は、随分たくさん収穫されていましたよ」とても楽しかったとのことです」

「お母様は、他の患者さんたちからママと呼ばれて慕われています。面倒見の良い方ですね」

「クリスマスパーティーで、歌を披露されました。なかなかの歌唱力です」

折に触れ届く手紙には、人間としての母の暮らしが綴られていた。母の日常を、温かい眼差しで見つめ寄り添う人がいる。それだけで十分だと思った。そして手紙の封を切る度に、私と母が救われていくように感じられた。

それでも、母に会うことは、さらに長い時間を要した。再会が叶った日、病棟の奥にある鍵のかかった扉を開けると、その先の長い廊下の途中に、笑顔の母が立っていた。白髪が増えて小さくなっていたけれど、そっと手を取ると、手をつないで歩いていた頃と何も変わらない母の手がそこにあった。

看護師長さんは、病める人たちも等しく、尊厳ある人間なのだと私に教えてくれた。手紙のやり取りが途絶えて程なく、ご病気で旅立たれたと伺った。母もまた、40年間の入院生活を終えて、2年前たひとりで母を見送った。

私は今、精神科のデイケアプログラムで、声を出すことの楽しさを患者さんに伝えている。看護師長さんと母が、寄り添うように傾いにいてくれるのを感じる時がある。私は2人の眼差しと共に、幸せな未来を生きている。

※文章は、原文のまま

入賞作品集をプレゼント

希望者に、今回の受賞作品を掲載した「入賞作品集」をお送りします。〒住所、氏名を明記し、140円切手を貼った返信用封筒(B5サイズ)を同封し、〒100-8055（住所不要）読売新聞東京本社事業開発部「生命を見つめるフォト＆エッセー作品集」係へ。5月中に発送します。締め切りは 3月31日(土)。◆本コンテストの問い合わせは、読売新聞東京本社事業開発部☎03-3216-8606(平日午前10時～午後6時)まで。

※個人情報は、発送のみに使用

■審査委員

東京大学名誉教授／解剖学者
養老 孟司

作家／福厳寺住職
玄侑 宗久

女優
水野 真紀

厚生労働省
大臣官房審議官
椎葉 茂樹

日本医師会常任理事
道永 麻里

読売新聞東京本社
医療部長
山口 博弥
（顔不掲・敬称略）

一般の部　入選

「みいちゃん へ」
坂口 有美子さん（東京都 30歳）

「あなたには、時間がない」
平井 真帆さん（埼玉県 44歳）

「ビールで乾杯」
御代田 久美子さん（東京都 62歳）

「心の交流」
森田 欣也さん（愛媛県 54歳）

「共感」
八木 房子さん（愛媛県 62歳）

中・高生の部　優秀賞

「患者の家族として」
穴田 未優さん（千葉県 15歳）

「幸せに『生きる』ということ」
古泉 修行さん（新潟県 13歳）

「ベッドで散歩」
下萩 南燈さん（東京都 14歳）

小学生の部　優秀賞

「私はNICU卒業生」
石野 美宙さん（東京都 12歳）

「わたしがうさぎに伝えたい気持ち」
新池谷 悠さん（群馬県 11歳）

一般の部　日本医師会賞

「A先生の『ここだけの話』」
渡辺 恵子さん（徳島県 58歳）

脳腫瘍で倒れ、意識障害を負い寝たきりになった父。父の主治医が語った「ご家族の幸せそうな顔を見せてあげてください。意識が混濁していても、相手の表情は分かる」という言葉を胸に、笑顔で最期まで寄り添うことができた。

一般の部　読売新聞社賞

「大きな地蔵さんのような病院」
小川 かをり（東京都 58歳）

我が子を500グラムの超未熟児で早産。そのことで母親失格と自分を責めていた日々の中で、初めて褒めてくれた祖当の看護師をはじめ医師など病院スタッフへの感謝の気持ちを忘れず、今でもその病院の横を通るとお地蔵さんのように手を合わせている。

一般の部　審査員特別賞

「がらんどうの生」
馬場 広大さん（鹿児島県 24歳）

薬に頼り、死も頭に浮かぶ中で一人暮らしをしていた大学４年間。その後、地元に帰って出会った心療内科の医師に「君は、生きる」と強く言われ、少しだけ生きる希望を持って現在も過ごしている。

中・高生の部　最優秀賞

「笑顔の力」
河野 未実さん（東京都 14歳）

認知症になり、日々記憶が薄れていく曾祖母。会話が少なくなり、自分のことも忘れることがあるが、曾祖母の笑顔で家族が救われている。笑顔になれる環境をつくってくれている施設の関係者、医師に感謝している。

小学生の部　最優秀賞

「おじいさんのお手つだい」
横山 紗来さん（兵庫県 8歳）

さまざまな病気、症状を抱えながら、毎日を懸命に生活するおじいさんのために、お手つだいをする自分。次にどんなことができるのか考えるのが楽しみになっている。

※文章は作者提供

受賞作品は右記アドレスからご覧になれます▶ http://inochi-photo-essay.com　生命を見つめるフォト＆エッセー　検索

主催：日本医師会、読売新聞社　後援：厚生労働省　協賛：東京海上日動火災保険株式会社、東京海上日動あんしん生命保険株式会社

中高生の部 最優秀賞

河野　未実（14歳）
東京都　学習院女子中等科

笑顔の力

「ぼっちゃんまたね。」

そうひいおばあさまに言われたとき、私は一瞬固まった。その時男の子に見える服装をしていたわけでも無かったし、一番おどろいたのはついこの間まで私のことを名前で呼んでいたひいおばあさまがなぜそんな間違いをしたのだろうか、ということだった。今考えると、その時からひいおばあさまの病気は進行していたのだと思う。

ひいおばあさまの病気が分かったのは、このことがあってから少し経ったときであった。ひいおばあさまは「認知症」だったのだ。私はその時、これからひいおばあさまと過ごす日々を大切にしようと決心した。

ひいおばあさまの記憶は日に日に薄れていった。会話が続かなくなっているなとは身をもって感じた。しかし、優しくていつも私を幸せにしてくれた笑顔は何一つ変わらなかった。私はその顔をみるたびに安心した。たしかに少しずつ自分を忘れていくひいおばあさまの姿を見ることはとてもつらいことだった。何度も前のひいおばあさまに戻ってほしいと思った。けれど楽しそうな顔で私に話しかける姿を見るとそんなつらさはまったくなくなった。

それからひいおばあさまは勝手に出かけてしまうことがあったり、夜中に何度も家の人を起こしてしまうことがあったりする為、施設に入ることになった。そのため、私はひいおばあさまに会うことがなかなかできなくなってしまった。会わない間に忘れられてしまったらどうしようという不安もあり、私は何度も会いに行きたいと母に言った。すると、やっとのことで予定があい、行くことができた。

久しぶりに会ったひいおばあさまは変わらぬ笑顔で私を迎えてくれた。しかし、口数は減り、とてもやせてしまっていた。私の横では母が涙ぐんでいた。その姿を見たひいおばあさまが心配そうに母を見る光景はとてもかわいそうで、私自身も涙が出そうになった。

それからしばらく私はひいおばあさまに会いに行けていなかった。中学校へ進学したことで忙しくなり、予定があわなかったというのが大きな理由だ。しかしこの間、久々に会えることが決まった。私は嬉(うれ)しくてたまらなかった。

ひいおばあさまの所へ行く当日、私はとても楽しみでずっとわくわくしていた。部屋へ入ると車いすの上でとてもやせてしまったひいおばあさまがじっとこちらを見つめていた。すると突然ひいおばあさまの目から涙がこぼれた。口がかすかに動いていたので、よく見てみると、

「ごめんね。ごめんね」

とくり返し言っていることが分かった。私が思わずひいおばあさまの手をにぎると、ひいおばあさまの顔にあの優しくすてきな笑顔があふれていた。私たち家族はその笑顔を見て、みんな一瞬で笑顔になった。そしてひいおばあさまの部屋には笑顔があふれていた。

私はひいおばあさまの病気を通して、大きく二つのことを学んだ。まず一つは認知症という病気の怖さだ。ひいおばあさまはこの病気が発覚したあと薬などを飲んだが、あまり効果がなく、どんどん病気が進行してしまった。もっと早くに気がついていたら話が別だったのかもしれないが、私はその進行の速さにとてもおどろき、この病気の恐ろしさを痛感したのだった。

そしてもう一つは「笑顔」のもたらす力の大きさだ。ひいおばあさまが私のことをどんどん忘れていってしまいとてもつらかったが、ひいおばあさまはどんな時でも笑顔だったので、私はなぜか安心した。自分のことを忘れてしまっても、この笑顔だけは忘れてほしくないなと心から思った。

私は最後に、ひいおばあさまのことを支えてくださっていた施設の方や病院の方へ心から感謝をしたい。私に毎回安心感をくれた「笑顔」をひいおばあさまが作れるのは、毎日毎日施設の方がいい環境を整えてくださっているからだ。また、ひいおばあさまの病気と真剣に向かい合ってくださった先生方がいたからこそ今のひいおばあさまがいると思う。今書いただけでなく、本当に数えきれないほどの支えがあるからこそ、ひいおばあさまは笑顔をたやすことなく生きているのだなと思う。

私には一つ夢がある。それは「私が二十歳になるまではひいおばあさまに元気でいてほしい」ということだ。私が二十歳の時、ひいおばあさまは100歳である。大人になるという区切りの歳と100という歳を一緒に祝いたいのだ。だから、これから先もいろいろな方に支えられながら笑顔をたやさず生きてほしい。

受賞作品を読んで

認知症になった「ひいおばあさま」と真摯に向き合う中での気付きや学びを、真っ直ぐに描く筆の力に感嘆しました。文体から伝わる河野さんの誠実さは「ひいおばあさま」に育てられたお母様から受け継いだものかもしれません。

読み進めていますと、変わりゆく「ひいおばあさま」の本質は実は不変なのではないかと考えさせられます。河野さんの大好きなひいおばあさまの「笑顔」もその本質のひとつなのでは…？

愛想笑いでも作り笑いでもない内から湧き出る微笑みの力は大きいですよね。そして、河野さんの病院、そして施設スタッフに対する感謝の気持ちはみなさんを「笑顔」にすること請け合いです。

（水野　真紀）

中高生の部　優秀賞

患者の家族として

穴田　未優（15歳）
千葉県　学習院女子中等科

午後10時、家の電話が鳴った。父はまだ帰ってきておらず、母は車で兄を駅に迎えに行っていたので、家には私以外誰もいなかった。私は布団の中にいた。遠くで鳴っていたのは聞こえていたが、うとうとしていたので電話には出なかった。

それは、父方の祖母からの電話だった。がんで闘病中の祖父が自室で意識を失い、病院に運ばれている救急車の中から、携帯で掛けていた電話の音だった。

結局、祖母は駅で兄を待っている母の携帯に掛け、連絡が取れた。私は、兄の迎えから帰った母に起こされ、状況を説明されながら服に着替えた。

仕事中の父とは連絡が取れないままだったので、母の運転で病院へ向かう車の中で、連絡を取ろうと私は何度も父の携帯に電話を掛けた。

病院に着くと、待合室に座っている祖母を見つけ、駆け寄っていった。祖母から、今、祖父は気管を切開し処置してもらっているということと、救急車で運ばれるまでの経緯を聞きながら、待合室にいた。皆、落ち着かない様子で、私は祖父に何が起こっているかよくわからず、心がざわざわしていた。

しばらくして、青い服を着た医師に診察室に呼ばれた。運ばれてきたその病院は、祖父が通院していた病院ではなかったので、カルテを取り寄せる為の質問や、祖父のこれまでの治療内容などを聞かれた。それらの質問のうちの一つのように医師は祖母に

「ご主人は、延命措置を望まれていたのですか?」

と聞いた。祖母は

「私たち夫婦は延命措置を望んでいません。」と答えた。すると医師は

「え?　今したのは延命措置ですよ!」

と言い、祖母は「えっ?　延命措置は望んでいません。」

と再び答えた。

祖母は救急車の中で、救急隊員に

「気管を切開していいですか?」

と聞かれ、それが延命措置ということを知らず

「お願いします。」

と言ったのだった。それが救急隊員から医師に伝えられ、措置が行われたのだった。

医師は少し怒った口調で

「一度延命措置を行ったら途中でやめることは出来ないんですよ。人工呼吸器のスイッチを切ることは殺人になってしまうので医師でもできません。」

と言った。祖母は

「気管の切開が延命措置とは知らなくて…」と戸惑っていた。医師はさらに

「患者の家族ももっと勉強するべきです。知らないでは済みません。」

と語気を強めた。

その後、祖父は処置室から病室に移動した。ベッドの周りのいくつもの機械に、管で繋がれていた。

しばらくして、父が職場から駆け付け、病院に到着した。祖母は父に、今に至るまでの祖父の様子や、望んでいなかった延命措置をし、医師に叱られたことを話した。父はそれについては

「色々な立場や考え方がある。」

とだけ言っていた。祖母と母は少し納得のいかない様子だった。

後に、当直の看護師から、担当の医師は凄惨な現場をいくつも経験し、厳しいことも言うが、患者のことをよく考え、信頼の置ける先生だということを聞いた。

色々な意見があることはもっともだ。また、患者家族が勉強をすることも必要なことだと思う。しかし、医療に携わっていない人は、医療用語にも疎く、このような状況に慣れていないので、混乱すると思う。そこに、医療関係者と患者・患者家族との理解の差が出来るのではないかと思う。細かい説明や確認をしてもらえたらその差は埋まるのではないかとも思う。

日をまたいで午前1時過ぎに、祖父はそのまま息を引き取った。延命措置のおかげで、仕事で到着が遅くなってしまった父も祖父の最期に立ち会うことができた。祖父は生前、延命措置を望んでいなかった。けれど、父は『結果としてよかった』と言っていた。

中高生の部　優秀賞

幸せに「生きる」ということ

古泉　修行（13歳）
新潟県　新潟大学教育学部附属新潟中学校

母の携帯電話が鳴ったのは、2月末の日曜日の夜だった。祖父が転倒して骨折し、救急搬送されたという内容だった。母と僕が病院に到着した時、既に祖父は病室のベッドに横になっていた。診断は胸骨骨折。救急車という言葉を聞いた時は驚いたが、骨折程度で済んでよかったと、僕は内心ほっとした。しかし、祖父は血液中の酸素量が少ないという理由で酸素吸入を行っていた。また、看護師が体に手を触れるだけで痛がり、悲鳴を上げた。付き添っていた祖母と母の表情はとても硬い。「やばいのかな。」僕は不安を抱いたが、周囲に漂う重々しい空気が、自然と僕を黙らせた。

「もう二度と家には帰れない。」その時、祖母も母も覚悟したそうだ。それは、一時的な骨折以上に深刻で重い問題だった。足の悪い祖父は杖を使用し歩行していたが、骨折をきっかけに寝たきりになる可能性が大きいという。祖母と二人暮らしの祖父は、寝たきりになったら、祖母の手を煩わせないために、施設への入所を考えていた。そして、その時期が予想以上に早く訪れたと、母たちは動揺していた。

骨折による痛みは数日で引いたが、呼吸状態は悪く、祖父は安静を強いられていた。母は毎日の様に付き添っていたが、僕も少しの時間を見つけてお見舞いに行った。病室に入ると、祖父は目を閉じていることが多い。しかし、その厳しい表情から寝ているのではないことがわかる。眉間にしわを寄せ、じっと耐え忍んでいる様に見えた。元々聴力が殆どない祖父と、僕は多くを語り合った経験がない。だから、大好きな祖父を目の前にしても、その表情から心情を探ることは難しかった。「何を考えているのだろう。ベッドという狭い空間に縛られていることが苦痛なのかな。」と、僕は想像した。祖父は、歩行こそ杖の力を借りたが、その他の事は自身で積極的に行っていたからだ。あの元気だった祖父が、退院への意欲どころか生きる気力さえも失っている。その様子に僕は驚いた。生活環境の変化が人に及ぼす影響は、とても大きいのだ。

入院して10日。状況は変わった。呼吸困難の原因を胸骨骨折による血胸（肺に血液が溜まること）と判断した医師が、治療として肺穿刺を行うと、家族に説明した日だ。レントゲン上、肺に影が認められたという。母は、日ごろからの様子で、肺の影は骨折によるものではないと感じ、その思いを医師に伝えた。「酸素濃度の低下は以前から指摘されていたし、少し歩くだけで息切れがしていました。」医師は、母の言葉に親身に向かい合ったという。入院前の祖父の様子を丁寧に聞き取った結果、追加の検査を経て、肺の影は心不全により貯留した水だとわかった。すぐさま利尿剤による治療が開始され、みるみる祖父の状態は回復に向かった。加えて、ベッド上で排泄をしたくないと言う祖父の希望を受け入れ、ポータブルトイレを脇に設置。退院に向けての、リハビリによる歩行訓練も開始された。「ADL（日常生活動作）拡大に向けてのリハビリを行い、自宅での生活に戻ることを目標にしましょう。」医師の言葉は、家族全員の心に希望を与えた。

僕は今まで、医師の役割は病気を治すことだと思っていた。しかし、祖父の主治医は身体の回復を目指すだけでなく、祖父及び家族である祖母や母の心にも寄り添い、生きる基盤となる退院後の生活まで考えてくれた。また、祖母の心身を気遣い、会う度に「無理しないで自分を大切にね。」と声をかけたそうだ。

祖父の入院で、僕は「生きる」意味を考えた。命の灯火が尽きぬよう守られていたとしても心までは満たされない。自らが望む生活環境の中、自らの意思で生きる意義を見いだすことが、人間として幸せに生きることなのだ。身体面、精神面、社会面でのバランスがとれてこそ、明日に向かう意欲がもてると知った。

入院して約1か月が過ぎた。季節は春に変わり、僕は小学校の卒業式を迎えた。僕の学生服姿を見たがっていた祖父のため、卒業式が終了したその足で、お見舞いに行った。この日の訪問は、祖父には内緒。サプライズだ。学ラン姿で病室に入ると、祖父の表情は一瞬の驚きの後、直ぐに満面の笑顔に変わった。「なおちゃんは、おじいちゃんの生き甲斐だよ。ありがとう。ありがとう。」

何度も言い、嬉しそうに卒業証書を眺めた。

退院祝いは、中学入学祝いと共に行うことができた。入院当初は諦めかけた社会への復帰。これも医師のお蔭だと感謝している。入院を機に歩行器を使用することになった祖父。しかし、慣れ親しんだ自宅での生活は、祖父を再び笑顔にした。病気の治療に関しては、医学的な知識をもつ医師が活躍する。しかし、患者が生きてきた長い歴史と生活における膨大な情報量は、家族に勝るものはない。医療者と患者・家族が同じ一つの目標に向かいチームワークをもってこそ、最高の結果となる。

僕たちの心に寄り添ってくれた医師の様に、僕も今後は祖父の言葉にもっと耳を傾ける。さらに元気に、長生きして欲しいと願うから。

中高生の部　優秀賞

ベッドで散歩

下萩　南耀（14歳）
東京都　東京学芸大学附属小金井中学校

いま、私は医者になろうとしている。昔から父に医者になったら?と言われていたが、絶対にありえないだろうと思っていた。なのに、私はいま考えてもみなかった医者になろうとしている。

3か月前、救急車で病院に運ばれた。事故にあってから病院で目覚めるまで、私は何も覚えていなかった。ここがどこなのかさえ分からず、不安だった。そんななか、朦朧としている私に

「みなかちゃん、分かる?」

と先生が呼びかけてくれた。その優しい微笑みにほっとした。

私は、足と腰を骨折して入院初めの2か月間ずっと寝たきりでベッドの上だけの生活をしていた。ベッドは30度までしか上げてはいけなかった。その生活に慣れていくうちにリモコンを見なくてもこれは何度だ、と分かるようになった。例えば本を読むときは10度、ご飯を食べるときは22度と最適な角度も決められるようになった。

本当に、げっそりした長い病院生活。友達からも、

「つまんないでしょ。」

とよく言われた。実際できることも限られ、学校でみんな何をやっているのだろう、と苛立ちも感じた。ゴロゴロして天井ばかり眺めているしかない不自由さに嫌気がさし、とても辛かった。

だがいつのまにか、この生活の中でも楽しみを見つけられるようになっていた。それは病院で感じるたくさんの人の優しさがあったからだ。

先生は毎朝7時頃こっそり様子を見にきてくださった。私が読んでいる本を見ておもしろいよね、とたくさんおしゃべりしてくださり、怪我だけでなく心の支えにもなっていた。学校の夏休みの宿題で職業新聞を書きたいとお願いしたら、先生はわざわざインタビューのために時間をとってくださった。忙しくて回診に来られなかった先生は、夜遅くにも顔を覗かせに来てくれた。外来の患者さんも診察していると聞いたので、いったいいつ睡眠をとっているのか疑問に思うほどだった。

窓の外はもう夏だった。ガラス越しに聞こえる蝉の鳴き声も汗をだらだら流しながら面会にくるお母さんも、私とは程遠い世界だった。去年の今頃は水泳部員として元気いっぱい真っ黒になり水しぶきを上げながら泳いでいたのに、今年は冷たいプールの水にも入れず顔さえ洗えなかった。夏休みにああしようこうしようと練っていた計画も全てボツになってしまった。周りの友達をとても羨ましく感じながら、寂しくクーラーがんがんの部屋で過ごしていた。

しかし、そんなある日いきなり先生がやってきて

「久しぶりに外へ散歩にいこうよ。」

と声をかけてきた。散歩?どうやって?ベッドで起き上がることもできないのに?と、私の頭にはクエスチョンマークばかりが渦巻いていた。だが、そんなこと関係なしに先生はガラガラと私のベッドを外へ押していった。とても、驚いた。ベッドで外へ出るという有り得なさに仰天した。ベッドを押してくれながらも、先生は仕事の大変さや面白い裏話をこっそり教えてくれた。

久しぶりの外。1か月ぶりの外。先生は分かっていてくれたのだ。外に出られない喪失感と夏の暑さを感じられない悲しさを、気づいてくれていた。嬉しさが溢れてきた。外は、とても暑かった。室内のクーラーの中でずっと過ごしていた私は滝のような汗を流していた。蝉もうるさかった。しかし、ずっと憧れていた外は本当に気持ち良くて心が解き放たれた気持ちになった。

たくさんの新しい患者さんも入院してきて、夜勤もあり、寝不足が続く忙しい先生。職業インタビューで質問したとき、一番辛いのは「寝不足」だと言っていた。私のために割いてくれる時間を睡眠に使わせてあげたいと思った。

患者の気持ちを分かってくれ、親身になってくれた先生に、心から「ありがとう」と言いたい。病気や怪我を治すだけでなく、患者の気持ちに寄り添い、患者を笑顔にする。私は、そんな先生のような医者になりたい。

患者のことを誰よりも考えてくれるお医者さん、テレビドラマの話などを楽しくしてくれる看護師さん、元気?とよく話しかけてくれる掃除のおばさん。病院に入院して初めて、病院は本当に優しさに溢れた人たちで成り立っているのだと実感した。この入院生活がなかったら、私は病院の素晴らしさに気づかなかっただろう。だからこそ、この二度とない自分だけの体験を活かし、私は患者さんに喜んでもらえるような、そんな笑顔を分けてあげられる医者になりたいと思う。

小学生の部 最優秀賞

横山　紗来（8歳）
兵庫県　愛徳学園小学校

おじいさんのお手つだい

7月29日、おじいさんが、やっと、たいいん出きました。

きゅうきゅう車ではこばれて、しんふぜんだとわかり、1か月半い上、入いんしていました。けんさをすると、ごえんがあることも、わかりました。おじいさんには、ほかにもびょう気があります。つえをつかわないと歩けないし、小さい字もみえません。3年前から、耳も聞こえなくなりました。でも、まったく聞こえないのではなくて、ゆっくりと、大きな声でお話すると、おばあさんと、わたくしの声なら、聞きとれることがあるそうです。あと、2日に1回、人こうとうせきもしています。だから、入いん中は、しんふぜんのちりょうしながら、とうせきをうけて、足の、リハビリも、がんばっていました。でも、おじいさんは、おかずをドロドロにした、ミキサー食がすきになれなくて、あまり、たべれませんでした。

わたくしは、しゅくだいがおわると、よく、おかあさんといっしょに、びょういんに行きました。そして、夕しょくになると、ちゃ色のミキサーは肉じゃがだとか、ミキサーみそしるのぐは、かぼちゃだと、声をかけました。おじいさんは、わかるとニッコリして、すこしはたべてくれました。おいしゃさまは、おじいさんは、はがじょうぶなので、たいいんしたら、おかずをゆっくり、よくかんでたべれば、ミキサーしなくてもよいと、教えて下さいました。しっかりたべて、力をつけてほしかったので、わたくしは、早くたいいん出きたらいいのにと、思っていました。

おじいさんは、家につくと、とてもうれしそうでした。とうせきをしているから、たくさんはだめですが、しょくじは、よくかんでおいしいといって、たべられるようになりました。だけど、すぐに力はつかないので、歩く時に、からだが、すごく前にかがんでしまいます。そんな時は、声をかけても聞こえません。わたくしは、おじいさんの目の前に行って、同じしせいをしてから、手を、せ中にあてて、せすじをのばしてみました。するとおじいさんは、気がついて、せ中をのばそうとしてくれるようになりました。

あと、入いん中はマスクをしていたから、おじいさんの口が、ずっとひらいたままになっていました。ポカン口は、びょう気になりやすいので、声をかけますが、いすにすわりおひるねをしている時には、おこしてしまいます。わたくしは、おこさなくてもよいように、そっとちかづいて、わたくしの人さしゆび1本を、おじいさんの下口びるにあてて、上に上げてみました。すると、口がとじました。なん回かつづけると、ポカン口をしなくなりました。

おじいさんは、まい日がんばっています。だから、わたくしも、つぎにどんなお手つだいが出きるのか、考えるのがたのしみです。

受賞作品を読んで

「おじいさんは、まい日がんばっています。だから、わたくしも、つぎにどんなお手つだいが出きるのか、考えるのがたのしみです」と結ばれていますが、横山さんは本当に真剣にそのことを考えています。

そして背筋を伸ばす見本を示すことや、「ポカン口」に人差し指一本を当てて眠りを妨げずに口を閉じる方法を考えだしたのです。

「将来は立派なお医者さんになる」などと、今と関係ない決意を述べたりする作品も多いですが、彼女こそ本当に目の前の「生命（いのち）を見つめる」人だと思います。素晴らしいです。

（玄侑　宗久）

小学生の部　優秀賞

私はNICU卒業生

石野　美宙（12歳）
東京都　東京学芸大学附属大泉小学校

母が妊娠高血圧症で長期入院をしているとき、更に常位胎盤早期剥離を起こし、母は心肺停止となり、超緊急帝王切開で私は心肺停止で生まれた。私は32週0日だった。私はペットボトルよりも小さな体で、すぐにNICUに運ばれた。幸い母も私も、後遺症もなく、奇跡的に2人とも助かった。

母の意識が戻ったのは翌日で、私に会えたのは2日後だったそうだ。

「有難う。生まれてきてくれて、有難う」

母が私に、初めてかけてくれた言葉だ。NICUはオルゴールの音楽がかかっており、私の入っているプラスチックの箱の後ろは、遊園地の観覧車や楽しそうな遊具が見えており、母はチューブだらけの体の私を見て、いつも泣いていたそうだ。

泣いてばかりの母を見て、看護師さんが「お母さん、赤ちゃんは一生懸命頑張っているから、お母さんはにこにこ笑っていてくださいね」と声をかけられたお陰で、母は泣くことをやめ、短い面会時間の間は笑って過ごせるようになったという。母が私の前で泣かず、にこにこ笑っているのは、恐らくこのころに母として強くなったのだと思う。

私が3歳になる前に、母のお腹の中に妹の命が芽生えた。病院から、「次の出産も必ずここで診てもらうように」と言われていたので、母は私を連れて3年ぶりに大学病院へ診察に行った。すると、母の担当医だった先生のひとりが、母を診ることになった。

先生は私を見て、「あれ？この子は……もしかして、あの時の子？」と言い、母は「そうです、この子があの時の子です」と言うと、先生はぽろぽろと涙を零し、声を震わせながら私の頭を撫でて言った。

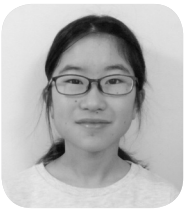
「君があの時の子なんだね。君が生まれるとき、本当に大変だったんだよ。うちの大学始まってからも、前例がないほどで。こんなことを言うのもおかしいけど、医学の力ではとても説明できないほど、神がかり的な奇跡としか説明ができないんだよ。そうか、君がそうなんだね。命を大切にね」

私が母のお腹にいるとき、そして生まれてくるとき、どれほど大変だったかを幼いころからずっと聞いてきたが、このときの先生の涙と「命を大切にね」の言葉が、どれほど大変だったか、どれほど命が尊いものか、私は妹のいる母のお腹を撫でながら、幼いながらも心に沁み込んだ。そして私は、大学病院の先生たちが母と私を助けてくれたように、私も人の命を救いたいと思うようになった。

私が生まれてから12年、干支を1周し、私は将来の進路を決めていく分岐点に立っている。干支が2周目を迎えるとき、私は私が卒業したNICUで、卒業生代表として、入学してくる小さな命と、涙を流すお母さんのために、私は命ある限り尽くしたいと思っている。「命を大切にね」の言葉を、私は多くの人に伝えていきたい。

小学生の部　優秀賞

わたしがうさぎに伝えたい気持ち



新池谷　悠（11歳）
群馬県　桃井小学校

わたしは、友達の家にいるうさぎのことが大好きでした。なぜならわたしは、そのうさぎをだっこすると、温かい気持ちになれたからです。

しかし、今年の5月に、この大好きだったうさぎが死んでしまいました。その時、わたしは悲しさのあまり泣いてしまいました。友達といっしょにおはかにうめてあげましたが、わたしは、うさぎが死んでしまったことを、なかなか受け止められませんでした。うでの中にうさぎをだっこした時のやわらかい感しょくやぬくもりが、残っていたのです。

それから1か月ほどして、友達の知り合いにうさぎをもらえることになり、わたしは、前のうさぎの分まで大事に育てようと心に決めました。しかし、そのうさぎは、わたしがだっこをすると、あばれたり、けったりするので、わたしは、びっくりしました。でも、わたしは、えさをひざの上であげるなどして、うさぎがだっこになれる方法を考えました。そして、何とかなかよくなりたいと思いました。

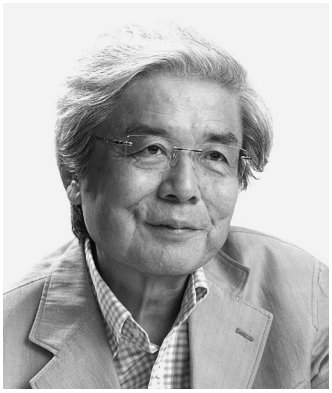
うさぎは、わたしのひざの上でえさを食べるようにはなりました。でも、うさぎはだっこがきらいみたいで、えさがない時にだこうとすると、わたしをけります。そうなると、わたしはとても悲しい気持ちになります。なぜなら、「好きだよ」という気持ちをこめて、うさぎをだっこしているのに、それが伝わらないからです。そんな時、わたしは、前のうさぎに会いたくなります。そして、もっとかわいいうさぎがほしくなったりもします。

3か月たった今も、うさぎは、わたしにきちんとだっこされてくれません。でも、頭をなでさせてくれたり、えさをもらう時にはおねだりで、手をわたしのかたに乗せてくれます。その時は、うれしい気持ちになります。

わたしは、うさぎの気持ちを知りたい、と思っています。うさぎは、頭や身体をなでてあげると、目を閉じておとなしくしているので、だっこがきらいなだけで、わたしのことがきらいなわけではないのかな。そして、うさぎをだっこしたいのは、わたしの望みであって、うさぎの望みではないのかもしれないことに気付きました。わたしは、うさぎをだっこして、温かい気持ちになりたいけれど、うさぎにも個性や気持ちがあって、ぬいぐるみのようにはならないことが分かりました。だから、わたしの思い通りにはならないけれど、うさぎがしてほしいことをさがしてみよう、と思いました。また、自分が想像していたうさぎとはことなるけれど、わたしがあずかった命なので、責任を持って最後までお世話をしたいです。

わたしは、今でも死んでしまったうさぎが大好きで、会いたいです。でも、今、わたしの家にいるうさぎのことも大切にして、大好きの気持ちを前のうさぎに負けないくらい大きくしたいと思っています。いつかは、わたしのうさぎへの気持ちが伝わるといいな。

審査講評（エッセー部門）



エッセー部門審査員
東京大学名誉教授／解剖学者
養老　孟司

先ほど審査経過報告がございましたけれども、何しろ千の桁から、私どもが最終的に見るときには数十の桁まで行って、それでも全部読むのは結構大変でございました。しかも小学生から大人までですから、テーマなどそれぞれの好みがある。ですから複数の審査員でやりまして、その中でやっぱり誰が見てもこれはよろしい、というのが選ばれたと思っていただければと思います。

先ほど写真の話がありましたが、文章は進歩したのかしないのか、今はメディアがいわゆるＳＮＳになり、皆さん短い文章をお書きになっているなと思います。そういう時代に、文章にいろいろ文句をつけると大変なのですが、文章で選んだわけではございません。もちろんそれも入っているのですけれども、やはりいかに読む方に気持ちが伝わってくるか、というところを重視しました。

僕が大学で医学部の現役でいた21年前に、既におもしろいことが起こっておりました。時々患者さんが文句を言っていたのを覚えています。それは「お医者さんが私を見ないで、カルテなりパソコンを見ている」というものです。それが次にどうなっていったかというと、銀行へ行ったら、「先生、手続きに本人確認の書類が要るんです」と。僕は運転免許を持っていませんので、「免許を持っていないんだけど」と言いましたら、「健康保険証でもいいんですけど」と。銀行に健康保険証を、普通は持って行きませんよね。そうしたら銀行員が、「困りましたね。わかっているんですけどね」と言いやがるんですよ。いや、私だってわかっているんだけど、本人確認。

そこで私は思ったんです。何を思ったかというと、手続きに行っている本人の、この私は誰だろう何だろうということです。仮に、うちに犬はいないですけれども、訓練した犬が私の健康保険証をくわえて銀行に行けば、それでいいのかなと。

また、会社で同じ部屋で働いているのに報告を同僚同士でメールでやる、上司にメールで報告してくると、お聞きになったことはありませんか。同じ部屋で働いているなら、見に来ればいいじゃないか、話しに来ればいいだろうと思いますが、それをやらないのです。ここまで来たかという感じがいたしました。

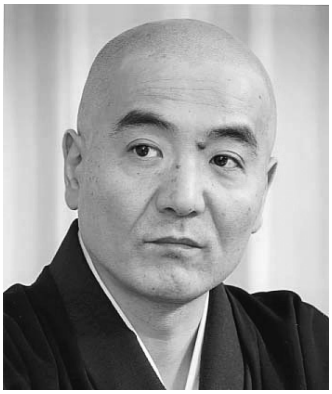
どこまで来たかというと、実は本人がいなくなっているわけです。実際にこうやって面と向かっている本人がいなくなって、これは今の世の中、これから相当また進むんじゃないかなと。お医者さんはどう思っているのかわからないのですが、じゃあ、本人はどうなったのかというと、現代用語で言いますと、そこにおられる皆さん方は全部、基本的にはノイズでございます。要らないんです。要するにコンピューターへ入るもの、データになるものが存在しているのであって、本人はうるさい、やかましい、邪魔くさいという、そういう時代。

だから私が文章を読ませていただいていて非常にいいなと思ったのは、一つは手書きのもの。これは審査員からしますと、読みにくいんです。字もいろいろですし、あっちへ行ったり、こっちへ行ったりします。でも、読むときのこれが大事なのです。何でＳＮＳを使って電話をしないのかというのも、電話はやはり声でわかってしまうんです。要するに声には、ノイズが入っているわけです。つまり、本人の機嫌であるとか。それがやはり今の人は、気に入らないのでしょうね。それを落とす。そうすると、やはり冷たい文章になります。

そこからいろんなことを読み解くのが、現在の技術なのかもしれませんが、そういう技術を私ども年寄りは持っておりません。ですから、できるだけ世の中から現物が落ちないように、私は一生懸命考えております。

そういう意味で選考は大変だったのですが、いい審査をやらせていただきました。順位をつけるというのは、大学におりましたときから大嫌いで、できることなら成績はつけたくないのですが、審査員のところへ上がってくるものは、ほとんど厳選されておりまして、どなたに賞を差し上げても私は差し支えないような気がしております。

申し上げたいのは、こういう時代でございますから、多くの方にまたぜひ書いていただいて、お送りいただければありがたいなというふうに思っております。



エッセー部門審査員
作家／福聚寺住職
玄侑　宗久

全体として、とても面白く拝読しました。

とりわけ今回は、社会不安障害という希少な病気の内実が、本人の緻密（ちみつ）な文章で描かれており、思わず息をのみながら読みました。精神科の患者自身の心がうまく表白されており、これは同じ病気の治療にも活かせそうな気がしました。

また「あの方のために演奏したい」（※）という文章にも感じたことですが、生命（いのち）をめぐる話題にはどうしても光の側面と闇としか言えない暗く重い側面があります。闇を知ることで光もより眩しく感じられ ますし、どちらも遠慮なく書いてほしいと思います。

※受賞作品以外の最終選考に残った作品

エッセー部門審査員
女優
水野　真紀

教育者であり、カトリック修道女でもあった渡辺和子さんの言葉に「学歴、職歴よりも大切なのは『苦歴』」というものがありました。

患者のみならず、心身の苦しみや痛みに真っ向から向き合った作品の数々には、誰もが心を揺さぶられ生命（いのち）について再考せずにはいられないことでしょう。書き記すという表現には底知れぬ力が宿っていることを今更ながら思い知りました。

また、小中高生の作品には共感力の輝きが随所に見られ、さわやかな読後感を味わわせて頂きました。

この作品集が多くの人の手に渡ることを心から願います。素晴らしい作品をありがとうございました。

最終審査員

【フォト部門】

写真家／日本写真家協会長	熊切　圭介
動物写真家	岩合　光昭
女優／音楽家	松下　奈緒
厚生労働省医政局総務課医療政策企画官	長房　勝也
日本医師会常任理事	道永　麻里
読売新聞東京本社編集局写真部長	滝鼻　太郎

【エッセー部門】

東京大学名誉教授／解剖学者	養老　孟司
作家／福聚寺住職	玄侑　宗久
女優	水野　真紀
厚生労働省大臣官房審議官	椎葉　茂樹
日本医師会常任理事	道永　麻里
読売新聞東京本社編集局医療部長	山口　博弥

審査員

【フォト部門】　第一次審査員

フォトエディター	板見　浩史
写真家	尾﨑　たまき
同上	小野　誠一
日本医師会広報委員会委員	天木　聡
同上	城守　国斗
同上	佐藤　光治

【エッセー部門】

第一次審査員

海野　光江	須藤　多恵子	日向野　初枝
北田　政子	染宮　美津子	藤掛　恵美子
篠﨑　健一	永井　富譽子	吉田　春江
渋江　芳夫	林　友子	
鈴木　貫一	針谷　文子	

第二次審査員

日本医師会広報委員会委員	井田　隆夫
同上	内山　政二
同上	阪本　栄
同上	白井　和美
同上	田内　美津子
同上	橋本　寛
同上	森　俊明
同上	山科　賢児

※敬称略・順不同

主催：日本医師会／読売新聞社
後援：厚生労働省
協賛：東京海上日動火災保険株式会社
東京海上日動あんしん生命保険株式会社

平成30年4月発行

読売新聞東京本社事業開発部

〒100-8055 東京都千代田区大手町1-7-1　電話：03-3216-8606　FAX：03-3216-8976
ホームページ：http://inochi-photo-essay.com

東京海上日動は、1999年度からNGO*をパートナーに、地球温暖化の抑制に役立つマングローブの植林をはじめました。マングローブ「海の森」づくりは、東京海上日動が地球の未来にかける保険。100年間植林を継続することを目指し、取り組んでまいります。

*「マングローブ植林行動計画」「公益財団法人オイスカ」(1999年度～)「国際マングローブ生態系協会」(2009年度～)

東京海上日動

東京都千代田区丸の内1-2-1　〒100-8050
0120-868-100　午前9時～午後8時(平日、土日祝とも)

To Be a ***Good Company***

東京海上日動あんしん生命

東京都千代田区丸の内1-2-1　東京海上日動ビル新館　〒100-0005
0120-016-234　平日9:00～18:00　土曜9:00～17:00(日曜・祝日・年末年始を除きます。)

TOKIO MARINE GROUP
To Be a ***Good Company***

第２回「生命（いのち）を見つめるフォト＆エッセー」応募規定

病気やけがをした時の思い出、介護にまつわる経験、生命の誕生にまつわる話、医師や看護師との交流など、医療や介護に関するエピソードや、生命の輝きをとらえた写真をお寄せください。

エッセー部門：
病気やけがをした時の思い出、介護や生命の誕生にまつわる話、医師や看護師、患者との交流など、医療や介護に関するエピソード、お世話になった医師や看護師ら宛てに送ったという想定の「感謝の手紙」などを募集します。

フォト部門：
生命の尊さ、大切さを感じさせる作品を募集します。人間、動物、自然など被写体は自由です。

賞：エッセー部門、フォト部門それぞれ日本医師会賞、読売新聞社賞、審査員特別賞ほか

募集期間：平成 30 年 5 月 10 日（木）～ 10 月 4 日（木）

■自作または本人撮影の未発表作品に限ります。盗作、二重応募、類似作品の応募は固くお断りします。応募作品について、盗作等による著作権侵害の争いが生じても、主催者は責任を負いません。
■応募作品は返却いたしません。
■入賞作品についての著作権は、主催者に帰属し、主催者が自由に使用できることとします。入賞作品は、主催者が管理するウェブサイトで使用されるほか、新聞、雑誌、テレビ、ラジオ、書籍、教材などに利用されることがあります。
■入賞作品の発表では、新聞紙面およびウェブサイトに、作品と実名を掲載します。
ペンネーム、イニシャル等での応募、発表はできません。
■医師および医療従事者も応募可能です。

募集要項は、５月に読売新聞紙面とホームページに掲載する予定です。
※上記応募規定は、現時点のものであり、変更となる場合があります。